

俳句雜誌

令和六年六月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十七卷第六号

水 明

2024 6月号



《今月のかな女》

裁ち縫ひの傍に置く子や梅雨の入り

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

地球温暖化に伴う日本の四季の乱れが無かった時代の俳句であるから、梅雨入りは六月十日頃かと思われる。どんよりとした日の昼間、和裁をしているのはかな女で、傍に居るのは養子の博であろうか。梅雨が明けたら着ようと、浴衣を縫っているのかと思う。俳句を離れたかな女の一面が興味をひくし、中七の措辞が、その子の行動パターンを暗示しているようで面白い。

(鬼之介・註)

— 華の一句 —

かちんこや騎馬軍疾駆する春野

近藤 徹平

「かちんこ」は、映画の撮影で監督が本番撮影開始の際に打ち鳴らす道具のことで、映画撮影所の俗語である。監督がかちんこを鳴らすと周りのスタッフの間に緊張が走り、猛然と騎馬の軍勢が野面を駆ける。かつての映画「蜘蛛巣城」「関ヶ原」、NHK大河ドラマの「天と地と」等、両陣営から土煙を巻き上げ突進する騎馬軍のシーンが眼に浮かんでくる。

(鬼之介・推薦)

水明

令和6年
6月号

今月のかな女

華の一句

花王の庭(作品)

江戸の風(近詠)

初夏一日(近詠)

煌星 雪欄作家近詠鑑賞

ゆずり葉 季音月評

季音「雪」(同人作品)

季音「月」(同人作品)

季音「花」(同人作品)

『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

五月号の巻頭句

俳誌望見

句集喝采

山本鬼之介

山中みどり

石井喜恵

正木萬蝶

檜鼻ことは

石山かつ子 大橋 勉代 ほか

大場 順子 松井由紀子 ほか

梅澤 佐江 野田静香 ほか

河野はるみ

石川 理恵

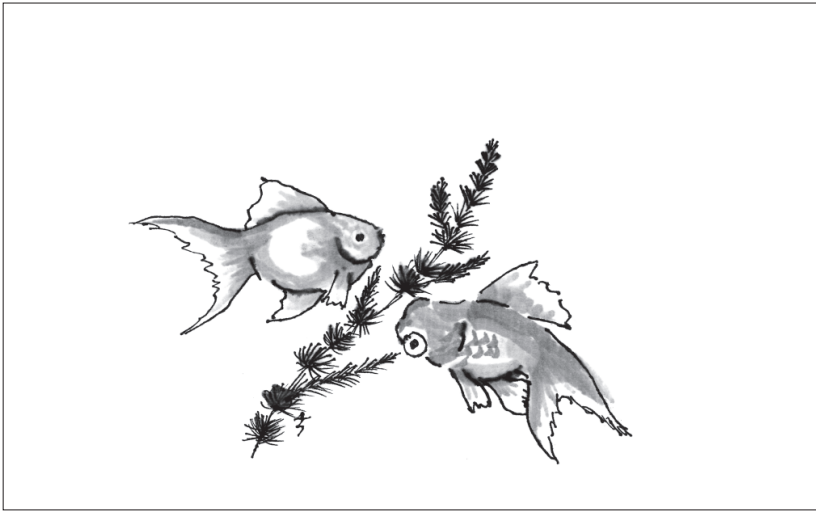
加藤絵里子

網野 月を

染谷 風子

55 33 32 30 29 24 19 12 10 8 7 6 4 1

曲淵 徹雄



水明集

池田珪子
菅原卓郎
ほか
篠崎紀子

水明集作品評

山本鬼之介 46

水琴窟（水明集四月号鑑賞）

池田雅夫 50

鼓笛集（同人作品）・私の一句

52

山紫集

56

年間予定・合併号について

62・63

水明例会報・各地句会報

64・67

水明全国大会のお知らせ

72

夏行のお知らせ

74

風声・発展基金御礼

75

後記

題字…長谷川かな女 表紙…内田恵子 カット…福田千春

花王の庭

山本鬼之介

山籠り終へたる行者余花の径

首夏の夜やむかし栄えし伊丹酒

黒帯の少年母の日に一本

時を得て画聖の庭の白牡丹
場所入の華よ五月の役力士
白鷺を遠見に峡の蔵座敷
黒堀や浮世小路をゆく日傘
かわほりを海へ蹴散らす大落暉

江戸の風

山中みどり

柳絮飛ぶ浜町河岸の舟燈籠
葉桜や鬼の平蔵の旧居跡
良く揃ふ手締め三社の夏祭
両国に幟はためく五月場所
暮れ残るお台場水面に屋形の灯
江戸前の鱧の天麩羅屋形船
餌をねだる鷗と遊ぶ屋形かな

隅田川に架かる厩橋に程近い此の地に嫁いで、早や六拾余年となる。当時の町名は厩橋であつたが一九六四年からの住居表示により本所となつた。行政から町名変更の示唆があつた時、厩橋一丁目から四丁目の町会長達が江戸時代から此の一带の総称であつた本所を希望した。これには「本所」を独占したと他町から不満が噴出したさうである。鬼平が着流して闊歩し、北齋が筆をふる「本所」には江戸と云う新興都市の持つエネルギーが漂っている。来る人は拒まず、狡さや意地悪を軽蔑し、気の利いた親切には「粋だねエ」と喜び、お祭り大好き！そんな江戸の風が今も流れているような気がする。私が立ち上げ船出した本所地域「ブラザービッグシップ」も昨秋には十周年を迎えた。此処で開かれた水明の吟行会で主宰からは「花吹雪ビッグシップの船出からは」挨拶句をいただいた。ビッグシップは今日も江戸前の老若男女で賑わっている。

初夏一日

石井喜恵

風薫る 思考 続けける ロダンの 像
ストラディヴァリの音 五月の コンチエルト
勇壮な ファイナール 汗に じむ 指^タ揮^ク棒^ト
薔薇 深紅カーテン コール 鳴り 止ま ず
氷菓 舐め 臍 出 出 出 ル ッ ク 妥 協 せ ず
マジシャンの胸 ポケット より 揚 羽 蝶
発 車 ベ ル 一 台 逃 が す 駅 薄 暑

最大十連休という今年の黄金週間。元来、人混みは嫌いなので何時もは家に籠もっているが、今年は一念発起上野までクラシック音楽会に出掛けた。人並に押され眩い許りの緑の中を、フランス語、イタリア語、中国語と擦れ違う。大勢の人の輪が出来ていたので私も人を掻き分け中に入ってみる。スーツ姿のマジシャンが巧みな日本語で今が佳境の熱演中、盛んに喝采を浴びていた。そして少し離れた場所に、これから店開きをするべく準備している若者の姿があった。喝采の輪を横目に黙々と作業をしている様子が、何故かいつまでも心残りであった。

煌星

季音雪欄作家近詠鑑賞

正木萬蝶

◇コンサート（三月号）

大村節代

其方此方から春著の人の集ひ来る
歓迎の獅子舞出づる大広間
青きドナウで始まる新春コンサート

春著を召した人々の晴れやかな様子を伺うだけでも気分が高揚してくる。コンサートが始まる前の獅子舞のお囃子など日本古来の芸能でのおもてなしでこれからのコンサートに心を委ねる前の華やきの演出が心憎い。

誰もが知る「美しく青きドナウ」。ゆつたりと時に跳ねるように煌びやかにワルツ王と呼ばれ宮廷舞踏音楽界に君臨したヨハンシュトラウスの代表作である。クラシックへの興味を扉を開く作品であると思う。

ペンライト揺るる会場冬、薔薇
冬灯余韻にひたる帰り道

フィナーレに近い最後の盛り上がりであるのか。パッハ、ベートーヴェン、モーツァルト等の作も曲目にあったのである。ペンライトが冬薔薇のように一斉に揺れ始め楽しかった時も終りに近づいて来た。

こういう時の帰路は一人が良い。誰にも邪魔されずに存分に感動を反芻したい。旋律をそれぞれの音色をタクトの緩急を。家に戻れば雑事に追われるのだから。

◇黄落（三月号）

菊池ひろこ

黄落へ青き炎のごと佇てり
予知夢に似たる無音や木の实降る
補聴器へ風音となる天の川

佇っているのは自身？第三者？現か？夢か？いづれにしても強烈な存在感が放たれている。そして予知夢、補聴器の句が続いている。年を重ねるにつれいやでも聴力や視力が衰える。無音と言いつつ木の実の降る音を感じ取っている。補聴器を吹き抜ける風音。一句目に戻り黄落の静かさが功を奏している。この三句を行ったり来たりで出口が見つかからない。まさに作者の得意とする句の世界、作句の術に嵌まってしまったのかもしれない。

時刻知るため時計台見る愁思
看護師の背後にかかり秋の虹

有名な所では札幌、明石市天文学館、そして銀座「和光」の時計台。作者を思えば銀座であろう。待ち合わせの刻を過ぎている。待つ時間の長さは何度も見上げる。スマホなど無かった若かりし頃の甘やかさで何ほ苦い思い出なのだろうか。いづれにしても愁思がその切なさを受け止めている。いまは男性看護師もいて頼もしい限りだ。休憩時間であろうか。背後に優しい虹。さあ、また頑張ろう。

◇麗日（四月号）

石山かつ子

琴を弾くからくり人形春の街
藩校の開け放たれて梅白し
大手門の乳鋏に錆や草萌ゆる
城町のここも丁字路梅の花
この町に生まれ嫁ぎて雛飾る

日光の匠が住み着き江戸に近いことから岩槻は人形の街として発展。岩槻人形は現在では伝統的工芸品に指定され日本一の人形の街となった。一九九六年から駅前シンボルとしてからくり人形が時を告げる。三人三様の愛嬌のある動きで首を振りその都度かんざしが揺れる。時代に合わせて街の風景も変わる。作者は人形を通して街の変遷を眺めているのだろう。岩槻城は太田道灌の築城、児玉南柯の私塾遷喬館が後に藩校に。茅葺の重厚な建物、襖を開け放てば何処までも広々とした座敷。庭の白梅の香が肺の奥に沁み透る。高度な文化を感じ取れる。子孫繁栄の意もある釘を隠す乳鋏は日本人の美意識。風雨に晒され黒門と呼ばれる大手門、錆は城の歴史そのものであろう。敵の侵入を防ぐために城下町の道路は入り組んでいる。この町のどこを歩いても梅の香りがする。目を瞑っていても歩ける位に町と一体になっている作者。代々の雛飾りに身内のように見守られていることであろう。街と町の使い分けに拘りを感じた。岩槻への溢れる愛でこれからお元気でご健吟を。

◇梅日和（四月号）

鈴木康世

恬淡と生きし姉なし梅の花
日溜りの椅子を分け合ふ梅日和
野梅咲く豊かに流るる水の音
撞く鐘の静かな余韻梅の里

コロナ禍以来、作者とはお会い出来ずにいるが第三例会へのお投句でお元気な様子が伺える。何よりだ。花の兄と云われる梅は春真つ先にひっそりと咲き始める。今は亡きお姉さまは無欲で輿床しい生き方を貫いた。嫁ぎ先は富士山の見える名旅館。若かりし時はお忙しく甲斐甲斐しく女将として働いたことであろう。芯の強そうなお姉さまへの尊敬の気持が恬淡によく表されている。憧れるが難しい生き方である。

お近くの公園なのか。椅子を分け合うのは亡きご主人さまとお姉さま？共に過ごしたかけがえない日々を慈しむには相応しい早春の一日であろう。

里に出掛ければ清らかな水音の豊かな自然が寿命の長く気品のある野梅を育てる。柿田川湧水公園を想像した。どこからか鐘の音が空に消え残るは寂とした想いだけ。静けさを極めた世界である。

梅詠みて結句の一語書きなづむ

最後まで手を緩めない作者らしいお句である。書きなづむこそが求めていた結句ではないだろうか。トリックに掛かった不思議な感覚を覚えた。

ゆずり葉

◆季音四月

檜鼻 ことは

生前の秋子の逸話 梅真白 栢尾さく子

もう随分昔のことになりますが、「秋子さんが載っている」と伯父・伯母たちが、和服姿の秋子さんが掲載された雑誌を回し読み、楽しそうに話していたことがありました。それから数年して、秋子さんが急逝したとの知らせが地元が届きました。「秋子さんは昔から喘息もちで身体が弱かったから」と語っていた母の言葉を今でも覚えています。水明二代目の主宰となり、これからという時でしたので、何とも悔やまれる天逝であったことでしょう。

大正十五年、寅年の生まれです。もし、存命なら今年白寿を迎えられたのではないかと、清らかで品格のある白梅を言う梅真白の措辞からそんなことをふと思いました。

秋子さんの句集「菊風」を時々開くことがあります、掲句の逸話、機会があれば是非お伺いしたいと存じます。

水仙や沖を小樽へ向かふ船 町野広子

江戸時代から明治にかけて日本海で活躍した北前船。北前船の寄港地には今でも当時の船主の館が残っているところが多数あります。鉄道網の整備により国内の輸送は鉄道へシフトしていきましたが、その後も北前船の船主たちは小樽や函館などを主な寄港地として、北陸と北海道を結ぶ航海を明治後期の頃まで続けていました。

時は移り、掲句の船はたぶん舞鶴港か敦賀港から小樽へ向かうフェリー船のことであろうと推察します。十二月から二月にかけて、越前海岸には海岸の風景を包み込むように真白いな水仙の花が群生します。水仙が覆う越前海岸に立つと、沖には小樽へ向かうフェリー船の姿。美しい風景画のような一句に旅情を誘われました。

春の雪転びたる夫苦笑ひ 野口和子

春の兆しをそこかしこに感じられるころ、去り行く冬を惜しむように降る春の雪は、それほどに積もることはなく、知

らぬ間に消えてゆきます。なので、積雪の多い地域でも雪掻きなどの心配をすることはありません。ただ雨とは違い、春の雪は地面をとて滑りやすくしてしまい、ついうっかりすると転んでしまうことがあるのです。転んだのが一人の時ならば、少し痛む程度で、どうということはないのですが、人前であると仕方がないこととは言え、いいようのない恥ずかしさを覚えてしまいます。

ご主人の笑いは苦笑いでもあり、照れ笑いでもあったのであろうと自分の経験を思い出しながら掲句を読ませていただきました。

春近したうたう出来た逆上り

福田千春

逆上がりに苦労した覚えがありますので、微笑ましく読ませていただきました。NHKの人気番組「チコちゃんに叱られる」で、逆上がりのことが取り上げられた回がありました。東京大学教養学部の鴻巣暁先生のお話では、逆上がりは日常生活ではしない回転をしなくてはいけないため子どもたちにとっては難しい課題であるそうです。

それでは、何故小学校で逆上がりを教えることになっていくのでしょうか。それは「子どもたちに努力が報われる経験をしてほしいから」ということでした。子どもの筋力は弱いものの、体重が軽いので、練習してコツさえつかめば誰でもできるようになると言うことです。

でも、すぐに逆上がりが出来てしまう子と、なかなか出来ない子がいるのは事実。しかしながら、苦労した子のほうがその喜びはひとしおで、それを見守っていた周りの大人たちも嬉しさと安堵で胸をなでおろされたことでしょう。いい春になりそうです。

「たうたう出来た逆上り」その喜びが伝わってきます。

恐竜の骨の真贋山眠る 保坂翔太

友人の業績を伝える新聞記事を思い出した一句です。今から十六年も前のこと。記事の内容は以下です。「福井県立恐竜博物館は『福井市美山町の足羽川河川敷で、獣脚、竜脚、鳥脚の三種類の恐竜と中生代の鳥類の足跡化石が見つかった』と発表しました。発表によると、発見されたのは一億四千万年前の地層の足跡化石六点。鳥脚類で草食恐竜のイグアノドン類の足跡とみられるもののほか、大型の竜脚類と思われる足跡の一部や小型獣脚類の右足の足跡など、中生代鳥類の足跡化石も確認されました」

これらの恐竜の足跡化石を発見したのは、化石収集を生涯の趣味にしている私の友人。新聞発表の一年前に発見し、恐竜博物館に鑑定を依頼していたとのことでした。化石の事を語る友人の目はいつもきらきらとし、永遠の少年のように友に捧げたい一句です。

季
音
雪



杭を打つ 石山かつ子

店先に座敷幟の金太郎
づかづかと来て春の野に杭を打つ
春の野や搾乳の牛湯気の中
山に生き山を祀りて朴の花
遅桜湖に威を張る男体山

櫻 大橋廸代

いっさん
山を覆ひて枝垂櫻かな
絵馬額の剥落はげし糸ざくら
声明に間髪いれず初蛙
清濁をすべて呑みこむ櫻かな
白無垢をぬぐや蟒蛇桜鯛

大車輪 大村節代

白山吹こんな鄙まで異邦人
縁切寺の庭の山吹伸び放題
大空の余白目ざして鳥帰る
ジャングルジムに腕白小僧鳥雲に
風光る天地さかさま大車輪

諳ずる 小倉倭子

諳ずる句集「朗朗と」春の天
三拝の願ひはひとつ落花浴ぶ
遠き日の手紙を千切り遅桜
言の葉にこころ刺されて芽山椒
鳥雲に心折れしも人の声

盆梅 栢尾さく子

朝戸出の薫風今日の気力湧く
春愁の言葉しみじみ一人の夜
久々に仰ぐ青空梅は実
雨の夜を急ぐ子猫を啜へて猫
盆梅や嗟迷師を知る友もなく

桜餅 菊池ひろこ

人間もやはき葉を食み桜餅
長命寺桜餅とや川二筋
裏返るひらがな幟さくら餅
就職の皇女へエール遠柳
昭和めく池のさざ波遠柳

去 来 今 五 明 昇

庭 の 春 椎 野 美 代 子

幾 星 霜 学 寮 跡 の 藁 ゆ る
牧 開 き は や 風 と な る 駒 の 群 れ
新 し き 詩 句 拾 ふ ご と 桜 貝
鳥 雲 に 一 丈 五 尺 の 天 保 山
燕 来 て む か し が 還 る 城 下 町

定 刻 に つ ち く れ 鳩 来 庭 の 春
大 袋 に 光 の 春 よ 横 溢 す
蹲 の 水 の 溢 れ も 庭 の 春
色 違 ふ 夢 見 違 ふ る チ ュ ー リ ッ プ
朗 朗 と 齡 襲 ね し 花 一 樹

屋 根 裏 部 屋 境 延 昭

春 霞 島 津 初 花

春 の 野 辺 乳 房 で つ か き 牛 の 群
初 つ ば め 屋 根 裏 部 屋 に 小 さ き 窓
靴 を 手 に 歩 く 浜 辺 の さ く ら 貝
胸 に 抱 く 風 呂 敷 包 み 春 の 雨
も う 会 へ ぬ 朝 寝 の 夢 の 中 の 人

春 霞 発 酵 中 な る 谷 の 村
春 の 海 終 日 リ ズ ム 変 へ も せ ず
光 る 石 見 つ か る ま で の 春 の 浜
水 槽 の 魚 の 瞳 と 合 ふ 花 の 昼
桜 散 る 白 い 館 の 丸 ポ ス ト

櫻 咲 く 鈴 木 康 世

句友いま大方はなし櫻咲く
はらからの吾を呼ぶ声花の昼
身の奥に声の声あり櫻の夜
再会を果たす名残りの桜かな
可惜夜のひとり花見を楽しみぬ

孤 島 の 祠 田 寺 玲 子

須磨琴の調べ嫋嫋春惜しむ
夕東風や孤島の祠波あらぶ
国宝の城泰然と花の雨
風光る馬柵にはためく万国旗
ミモザ咲く坂に黒衣の宣教師

桜 鯛 十 倉 和 子

桜鯛優勝力士をかがやかす
鳴門渦見てきて舟盛り桜鯛
嘶家の出囃子にのり初桜
花吹雪廃止間近き路線バス
春光に神威しるけき蛇行剣

緑 蔭 鳥 羽 和 風

記念樹は今緑蔭にベンチ置く
緑蔭に緑兎入れて乳をふふむ
緑蔭の写る手杓をひと含み
緑蔭を懐にして村総出
緑蔭をひとつ借り切る露天商

プライド 永野史代

灯台のある町に古り山吹は
山吹の黄に焦れつつたそがる
切株のまだ真新らし春匂ふ
父のプライドいまだ健在昭和の日
臃かなポツケの合鍵見当たらぬ

夜ざくら 波多野寿子

夜桜や国宝の城仰ぎをり
一本のしだれざくらや野風吹く
空あをく堀にゆらゆら花筏
落花浴び我が人生を噛みしむる
里山を染めて美し飛花落花

春シヨール 星野和葉

酒蒸しの浅蜷ふあつと気がよれる
ふはりといふ他に術なき春シヨール
一ひらも落花吹雪の様も落花
腕まくりてふ仕事着や水温む
家紋ある閑伽桶見付く水温む

春の旅 茂木和子

風呂敷を解きて土産の椿餅
洗濯日和迂闊に外干し黄砂降る
踊るなら桜吹雪の真ん中で
春旅や神社めぐりに寄る茶店
うたた寝の犬山吹の黄に見え隠る

ランドセル 森本早苗

ふるさとの旅 柚木治子

八十路とて時に紅差す桜鯛
満面の笑みと桜とランドセル
花の下美しき鸚鵡と握手する
子達待つスワン八艘花の雲
三極の花の震へや小糠雨

初桜よべの雨滴のかがやけり
春風に吹かるる旅の薄衣
村ひとつ桜吹雪の白昼夢
山寺の高鳴る木魚花吹雪
浄土への一線を引く花の雲

初節句 山中みどり

子規球場界限 網野月を

孟宗の筍赤子の如く抱き
ときめいて剥く筍の白き肌
父譲り緋色陣羽織の初節句
赤飯の甘き香りや初節句
初蝶もお祝に来る今朝の庭

こもごもの背に現はるる桜冷え
花つぼみ付けて売らるる苗木かな
桜木に老練老残花の雨
花疲れレジに長蛇の人疲れ
蜀山人碑に石摺のあと花ぐもり

春 愁 石井喜恵

石蹴りの石は置き去り鳥雲に
燃えるごみ燃えないごみや鳥雲に
鳥雲に手桶の水のうす埃
ひそやかに彩ひろげ行く芝桜
惜春や手品師に種吾に愁ひ

❖原稿募集

季音 (雪・月・花) 五句 (巻末添付用紙)
水明集 五句 ()
山紫集 一句 ()
鼓笛集 三句 (編集部より依頼のあった方)
※二百字詰原稿用紙使用。
水明通信・随筆等自由にお送り下さい。
原稿締切 毎月二十五日お着
原稿宛先 水明俳句会 編集部
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇―二一

第23回 俳句四季大賞

第12回 俳句四季新人賞

第11回 俳句四季特別賞

結果発表

第24回「俳句四季」

全国俳句大会

結果発表

●好評連載

成瀬政博

とりあえずの日々

筑紫磐井

俳壇観測

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、

俳人の響き

大西朋

俳句へのまなざし

井上泰至

俳句の詩語

イメージ辞典

神作研一

てのひらの江戸

―古典籍を旅する

藤村公洋

俳句のつまみ

堀田季何

諸家書架

二ノ宮一雄

日野百草

●LEGEND

私の源流／古沢大穂

●俳句と短歌の10作競珠
林 桂＋高柳路子

●今月の華
蜂谷一人／名取里美

●巻頭三句
長谷川權／岸原清行
江中真弓／鴛田智哉
柴田鏡子／佐藤 風



Haiku Shiki

2024年7月号

6月20日発売
定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音月

菜の花明り

大場 順子

白銀の遠き山並花菜畑
 義経ここに亡び菜の花明りかな
 序の舞の気品のまなこ初桜
 老木の幹吹き出たる桜かな
 満願の色に桜と空の蒼

春の日

松井 由紀子

春日や眼鏡さがして小半日
 よろめくも老いの一興飛花の道
 紅筆と遊ぶ春宵九十九髪
 爪を研ぐ気合なければダリア植う
 文具選ぶふたりの銀座夏近し

遅桜

梅澤 佐江

身を投げ出すや直ぐに乙女となる春野
 墨東のしづかなる雨桜餅
 茶房の窓辺春の暮色に染まりゆく
 城跡の風にさゆるぐいちげさう一花草
 遅桜分水嶺の水浄し

かちんこ

近藤 徹平

かちんこや騎馬軍疾駆する春野
 竪穴にしのお縄文大春野
 菜の花や堤のうねり夕陽まで
 菜の花やSL高き夕汽笛
 英霊をしのぶ内堀御所桜

若緑

森川 義子

若緑威厳を保つ旧家の門
 合鍵や悪女めきたる春の暮
 春燈や義母の形見の江戸小紋
 存分の川風を抱き遅櫻
 道草のよき相棒や蛙の子

桜の夜 高島寛治

清明や口含みたる沢の水
カーナビの口調穏やか四月馬鹿
仏間にもくねりて届く春の風
桜の夜 婚礼談議沸騰す
空に向け走りて試す風車

空ふはり 池田雅夫

手に掬ふ水に五月の空ふはり
葉桜や路傍の椅子の二人掛け
一文字に風を呑み込む鯉幟
矢車に押し寄する風どつとどつと
古裕帯の代はりの太き縄

猿沢池 正木萬蝶

蓬餅女系に初の男児生る
猿沢の池や采女の影おぼろ
おみくじの凶を預けて桜餅
尼寺の作務衣の淡し桜餅
雅び男のいまは老農花菜風

花吹雪 藤澤喜久

雨上がりほのと色差す糸ざくら
春の雨かな文字に似て何処か艶
夕桜絶え間なく散る月命日
花吹雪 紫黄師 偲ぶ常温酒
逝く春や張子の虎の首延ばす

花菜漬 井上燈女

花筵這ひ這ひの児を引き戻す
櫛あらば添へてやりたき花筏
主婦の座を渡す嫁なし花菜漬
種浸し千の泡生む小さき音
田芹摘む水を濁して鉄洗ふ

木の駅舎 町野広子

朝市の焼け跡残し鳥雲に
雁帰る畑土黒ぐる広がりぬ
ひこばえや今も故郷に木の駅舎
線路沿ひ八重山吹の小径かな
ガス交換の背に触れたる濃山吹

芽吹く色 丸山 マスミ

清明や花巡礼の杏子墓碑
植木市素通りさせぬ粹な声
揺るるかに飛天の裾や夕桜
気品ある老妓の立ち居花明り
芽吹く色まとふ古木や神の池

陽 春 松宮 保人

野良のまま柏手打つて社日様
春服の声華やかに天満宮
公園の薄暮にぼつり半仙戯
陽春の供華新しき卒塔婆かな
陽炎や鉄路容易く歪めたり

春 灯 荒井 俱子

叩かれて眠るバン生地春の雨
サイホンの気泡ふつつ春の雨
春灯や坊の夕餉の湯葉づくし
ふらここの揺れを残して児が去りぬ
花吹雪少女はらりと逆上がり

別れ霜 松本 光子

向島江戸の名残りの別れ霜
研ぎ上げの農具一列別れ霜
坂と橋多き東京花は葉に
深川飯の匂ひなつかし別れ霜
一列に帰る雁が音三の丸

春の暮 井上 玲子

むらさきにけぶる秩父嶺春の暮
暮れてなほ空の青さや春の宵
門前は百花乱るる植木市
植木市夢をはぐくむ桃苗木
独り居のさ庭明るし黄の牡丹

百葉箱 大塚 茂子

清明や風呂呂出る嬰の蒙古斑
清明やパドル体操二人増ゆ
水温みため息もらす百葉箱
美容院つばめ三代育つ軒
花曇兄ゆつくりと逝き逝きて

燕

内田 恵子

薬や背中にあまるランドセル
薬やくんづほぐれつ通学路
神域の杜のざわめき鳥雲に
直線に碧天を截り燕とぶ
少年の狙ひは飛燕シャッター押す

若 緑

山田 美佐尾

口遊むあの日の歌を名残雪
山路来て足元に咲く一輪草
一輪草あねさま歌ふ「子守唄」
玉砂利を踏みて境内若緑
神宮の森に 飴や 若緑

鬼石桜山

野口 和子

桜一片カーウインドに下山かな
古木若木花競ひ合ふ桜山
靴の底薄紅色や花吹雪
花疲れバッグの底の飴袋
水底の石はまんまる春の川

鹿の子作り

上戸 千津子

久々に鹿の子作りや桜鯛
老ゆるほど母に似てきて木の芽味噌
花筏石に乗り上げ難破せり
臺が立ち十字背負ふや花大根
促され杖つく稽古山笑ふ

燕 来る

川崎 道子

色町の名残りの格子燕来る
黒塀の入口さがす桜南風
不登校枝垂桜に囲はるる
桜鯛供へきらめく句碑除幕
惜春や海の恋しい錨

桜 貝

松山 清子

海臨む山の傾斜の初桜
上人の風待ち浦の桜かな
咲き乱れ笑ふかのやうチューリップ
小さき掌にかたく握られ桜貝
駐屯地のジープの放列花吹雪

昭和は遠く

福田千春

昭和の日蝕ウインナーが赤すぎる
卓袱台を畳んで寝床昭和の日
父母の声思ひだせずに昭和の日
添へてあるメモに花びら桜餅
葉をはがす子に通ぶつて兄桜餅

桜鯛

西浦千枝子

遠景に春雪被る紀州富士
雲上の風をしのぎて城の花
舗装路の蛇行のみこむ若葉山
骨折癒え祝ひの膳に桜鯛
三歳児画用紙一面菜の花を

再会

熊倉千重子

糸柳丹塗りの橋をくぐる鯉
奥の間に残る母の香春惜しむ
桜とのコラボ黄の花真つ盛り
花吹雪浴びつ再会カフェテラス
水温み水琴窟のまろき音

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊俳句界

2024年7月号

特集

潜在意識と俳句

○潜在意識（無意識）とは何か

河合俊雄（心理学者・京都大学名誉教授）

○潜在意識から出来た俳句

浦川聡子 木暮陶句郎 照井翠

津川絵理子 中岡毅雄 今瀬一博

鵜田智哉 大西朋 小田島渚

タラシク俳句界NOW 谷口智行

特集 師へ送る手紙

○俳人はなぜ師を尊ぶのか 青木亮人

○師への手紙

江中真弓 松岡隆子 横澤放川

田島和生 井上弘美 上野一孝

長島衣伊子 田中亚美 川越歌澄

●山本健吉評論賞受賞者の新作評論！

池田瑠那 「ひらかれる異界、ふたりの我
——上野泰が詠む鏡面——」

【注目の句集】墓目良雨『ここから』

*セレクション結社「あかり」名取里美

私の一冊 墓目良雨「春耕」

「俳句界」投稿欄 一流選者11名！
日本一充実の投稿欄

※一部変更の可能性があります。



株式会社 文學の森

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

季音花

寄り添ふは花

河野 はるみ

老いも若きもシャッターチャンス江戸桜
幹に根元に古木の桜日本橋
辛口の夫に供ふる桜餅
寄り添ふは石碑の根元一輪草
終着駅に人待ち顔の一輪草

さくら並木

野田 静香

一輛車さくら並木を抜け加速
春雷や水面さざめく船溜り
花曇我に苦楽の匙加減
後継ぎの仏師ながむる松の芯
遊印の押されし墨絵月朧

花筵

石川 理恵

菜の花や六地藏には赤きべべ
弁当のあれこれ零す花筵
無理せよと言はれてをりぬ春の闇
のどけしや恵比寿のカフェに待ち惚け
肩甲骨をはがす体操春深し

燕来る

下川 光子

棟上げの空まさをなり燕来る
燕来る町に一つの書店へと
水温む猫にいたたく大欠伸
懐かしきソファアの窪み春愁ひ
八重桜雨の重さに紅こぼる

齢人

曲淵 徹雄

むらさきに烟るものの芽小雨ふる
春場所や「けつぱれ」を背に電車道
かげろふに鉄路ほぐるる停車場
朝桜仰ぎて眩む齢人
名山の裾広げたる花菜かな

時の鐘 保坂翔太

若人が鄙を出でゆく雪の果
木の芽風行き交ふ人の声眩し
百段の春野の古墳登りけり
時の鐘響く城下や燕来る
百万石の櫓を掠めつばくらめ

弥生尽 笹本啓子

鶯の恋の泣き声揺蕩ふよ
村にべこ生れたる朝の八重桜
薄れたる柱のしるし弥生尽
生花展脇役となり春の草
揺り椅子を猫が占領春の昼

若緑 渋谷きいち

街道に江戸の名残りの若緑
老松の命燃やして松の芯
緑立つ母退院の咳払ひ
遠足の列が散らけて恐竜館
目印は孤高のさくら「滝桜」

船窓 横山君夫

船窓の丸き夕空雁帰る
咲き満ちて天地一体紅しだれ
春の風フォークダンスの帰り道
吊橋の風は谷から花の冷え
そよ風を斜めに通す糸桜

蝌蚪の紐 染谷風子

建国日妻に教はる針仕事
ふらり来て土筆を摘むや日和下駄
明日よりは企業戦士ぞ卒業歌
春場所や大坂城に触れ太鼓
万物の命の形蝌蚪の紐

春 原田秀子

青銅の風鐸 驟す初燕
幽かなる羽音にゆるるすみれ草
雪洞の微かにゆれて花曇
淀む池鯉に恋して背に蛙
外郎のほどよき甘味花曇

伊根 檜鼻 ことは

行く先は風に相談伊根の春
淡雪や伊根の舟屋の夕まぐれ
風止みて浜の宿屋の春灯
奥伊根の春暁にある島ふたつ
焼きもんはいづれは割れる春の夢

鼓 草 青木鶴城

葛藤の若きかの日日春の夢
春の風大人になればきつく吹く
雑踏をひたすら生きて鼓草
もう桜成すべきことの多すぎる
年ごとの記憶の薄れ斑雪

ものの芽 日高道を

土を分け石を動かし物芽出づ
ものの芽に幼な子の手のあたたかさ
ものの芽を驚かしたる酸性雨
ものの芽の一つひとつに今朝の顔
ものの芽や一秒毎のその命

和と洋取合せ 石田慶子

ジャズ流れ珈琲添へて桜餅
桜餅の葉器用にはがす君の指
水温むそつと小石を投げてみる
黄砂来る乗せてまつ赤なスポーツカー
コロッケにウスターソース昭和の日

理 瀬戸雄二郎

理科帳は置いて野に出よクローバー
桜餅二つは多し理系女子
理由くどくど開花日外し予報官
花見むと丘に登れば連理草
傷の理由親に言はぬ子磯遊び

雲 版 松島寛久

願ひ事叶ひ社日の農夫婦
春服や恋路の途次の胸騒ぎ
藻を刈りて儲かると言ふ春の磯
百年の春を開いて尊富士
雲版に目を覚ましたり臥竜梅

菜の花 飛永 鼓

菜の花の一叢ありて鳥羽谷よ
菜の花や谷間に仄と陽を灯す
菜の花や思はず唱歌口遊む
菜の花や戦火は遠い国のこと
菜の花の村は楽しきこと多し

昭和の日 鈴木 玲子

紺袴に桜色揺れ卒業す
身なりきちんところばゆきかな入学生
山吹やふんはり卵焼きサンド
昭和の日名司会者の決め台詞
ご隠居は大きい器よ昭和の日

春の月 野平 美紗子

高層のビル渡りゆく春の月
夕空に微睡むごとし春の月
春の宵日記また読む一周忌
蒲公英や留学の子を偲ぶ道
夫丹精の花の盛りとなる弥生

春惜しむ 宮崎 チアキ

早々とマネキン装ふ春着かな
路地裏の暗さ一変芝桜
彼方此方から寄り来る鳥や遅桜
糸柳揺れて大揺れ笹小舟
道の辺のゆかしき花や春惜しむ

飛花落花 高橋 満耶子

不動尊の目玉ぎらぎら飛花落花
丹田に力を入れよ飛花落花
大辺路をつなぐ渡し場花筏
閉店の最後のまかなひ桜鯛
断捨離に痛む心身飛花落花

茶室の小間 野村 美子

背低くとも佳き仁和寺の遅桜
経響く義姉の法事や桜散る
夕暮の水面を照らす八重桜
里山の湖畔の並木八重桜
庭園の茶室の小間や春の草

花まつり 葛城 千世子

直真に生くる金縷梅あみだ堂
軒下に吊る花玉や花まつり
青石を卓と椅子にし花見酒
入学式時間をかけて髪セット
新学靴に防水スプレーす

花 筏 田 中 章 嘉

チューリップ児童の心虜にし
花筏天の川まで流れ行き
子雀の小枝で親呼ぶ怖さかな
若鮎や小滝をいくつ石の肌
菊苗に去年の瘦せ苗添へにけり

☆ ☆

俳句

7月号
予告

6月25日発売

予価1,100円(本体1,000円)®

巻頭作品50句 一字多喜代子
作品21句 奥坂まや・中原道夫

大 特 集

俳句を世界に 発信する醍醐味

▼総論 俳句はなぜ世界中で愛されるのか…岩岡中正
▼各論 海外での実際の活動／俳句を海外へ発信するには
▼座談会 グローバルな俳句の本質
……………井上泰至×岸本葉子×堀田季何

句集特集 古賀しぐれ句集『湖の辺にして』

特別 寄稿 中村苑子について……………川名大

第58回 蛇笏賞受賞第一作……………小澤實

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

『水明誌』を緋く（水明四月号）

加藤絵里子（「山河」・同人）

神殿を毀すごとと踏む霜柱 梅澤佐江

今号で最も魅せられた句。この句の見事な点は、霜柱を神殿に喩えたこと、そして「神殿」が毀されてきた歴史を彷彿とさせることである。霜柱が生成されるまでの科学的過程は、神殿を築き上げるが如く、あるいはまたそれ以上に美しい。だがこの世に永遠に形を保つものはなく、いずれ毀れてしまう。儂いが故に美しさが増すといった論理である。

しかし作中主体自らが毀そうとしている点に、もう一段階上の物語がある。作中主体は今、毀す立場にあり、霜柱＝小さく弱い存在に対して、人間＝圧倒的に強い存在である。

「神殿」の喩えが、その二項対立に歴史性を付加する。人間同士の攻防や災害といった、外部からの不可抗力によつて、建築物を含む都市や集落は滅びてきた。いま作中主体は、強い立場である現状を俯瞰し、その歴史を思い起こさせ、将に実行せんとする立場なのだ。神話で言えば、神の立場であろう。そうした圧倒的な強弱の差ゆえの、人類の悲しい歴史・定めはまだ、思いや考えを至らしめる点にこの句の深みがある。なお、同じ作者の「勾玉の」句にも大変惹かれた。

初日影バベルの塔のようなビル 内田恵子

新年のめでたさに似付かわしくない取合せが、不気味さを放っている。この句では、陽光以外、つまり暦もビルも、人間の作り出した代物である。人間は、自分たちが編み出した装置や箱物のなかにいるからこそ、安心して暮らせるのである。科学技術を駆使した、敵や災害から守るための、要塞のような都市。摩天楼の立ち並び、人間が競い合う都市。技術向上による不可能への挑戦は尊い。しかしもしその挑戦の中で、人間が助け合うのではなく、蹴落とし合うのならば、やがて謙虚や理性を失うだろう。そうした人間性、人間の歴史自体に、恐ろしさ、愚かさがある。この句では、新年という人間の編み出した装置を安直に讃えてはいない。この句の不気味さは、作中主体が、あえてめでたい日に、まるで人間世界の外部から、人間の文明の興亡の歴史を批判的に捉えたような、無機質で冷徹な眼差しを向けることに起因する。しかしその批判的を射ているからこそ、読者の心に棘のごとく刺さり、抜けないのである。初日影という季語の選定の点でも、「影」の字にそのような鑑賞を促す効果がありそうだ。

現代俳句鑑賞

網野月を

花仰ぐ今際と同じ口を開け

高野ムツオ

〔俳句四季〕 4月号・巻頭句より〕

「同じ口」は口の形状を言っているのではなくて、同一の顔の部位を言い表しているのだらうと解釈した。今、この時花を見上げている自分と、やがて生涯する自分とを比して、な
お同じ人物であると言いついていてということなのであらう。
他に「人の世は異界桜の揺れ止まず」がある。

風船のうたかたの青君にあげる

鳥居真理子

〔俳句四季〕 4月号・季語を詠む風船より〕

上五の季語「風船」は手持ちであるのか、飛ばしたもののな
のか。たぶん飛ばしたものであらう。しばらくの間だけ見え
た空の青色の部分を「君にあげる」と言っている。「君」は
心の中の誰かでもあるし、「風船」に託して表現した「君」
であるとも読める。

誰よりも先に来ている寄居虫かな

岡田耕治

〔俳句四季〕 4月号・香天より〕

「ごうな（がうな）」と読むのであらう。何故に「先に来て

いる」のかは句に何も言っていない。中七で切つて上五中七
を作者の行動として捉えて座五の季語との取合せと解するこ
ともあるかも知れないが、筆者は「寄居虫」のことであると
解した。

母は^{むけん}∞を手招く如く海苔を焼く
貸し^{むけん}ボートが日本を引っぱつてゐる

小林恭二

恋どすかよろしおすなあ京雛

〔俳句四季〕 4月号・恋どすかより〕

第一句目は「∞」を「むげん」と読ませてお母様の焼き海
苔の際の手捌きを表現している。合わせて毎日変わらぬ母親
の家事振りを「むげん」に込めているのであらう。第二句は
「貸しボート」と「日本」を比してパレード的な視線を向
けて景を眺めているのであらうが、「日本」の現状に対する
皮肉めいた措辞とも受け取れないこともない。第三句は、標
題の「恋どすか」の一句である。何とも宜しい雰囲気の演出
である。景や句意を理屈で理解する句ではないであらう。

しゃぼん玉壊れない脳壊さない

石口りんご

〔俳句四季〕 4月号・わたしの歳時記より〕

句跨りの句として、「壊れない」で切って読めると思う。「しゃぼん玉」と「脳」の本来の特性を逆の表現でそれぞれの危うさの本質を引き出し出しているようである。

春の雪春の空から降りてくる

岩淵喜代子

〔俳壇〕 4月号・赤子より

「春の雪」を眺めていると、その雪を降らしている「空」を感じることにになり、その「空」が既に春の色合いを帯びていることに気づいた、ということであろう。丁寧な表現の中に句の意味を集中させている。他に「極月を赤子とともに過ごしけり」「赤子の間赤子の他に居ぬ雨水」がある。

新型コロナウイルスの頃。退職の挨拶はLINEにて

桜しべ降る詫びるともまた違ふ

西山ゆりこ

〔俳壇〕 4月号・窓辺より

誌の特集、俳句と「前書」に掲載されている実作句である。「退職の挨拶」の前書きが哀切でもあり、ご時世でもあるようだ。句も前書きも秀逸なのである。誌の特集が功を奏している。

逃げ水を幾たび象の横切りぬ

川森基次

〔俳壇〕 4月号・もう一羽より

上五の季語「逃げ水」は幻影であり、俳句心を刺激するものである。「逃げ水」が幻ならば、句中の「象」もまた幻であろうか。それとも遠くアフリカの景でもであろうか。句か

らはそれ以上の背景は分からない。が、「幾たび」も「横切」っている「象」を作者は認めている。確かなことは「象」がこの「逃げ水」を追いかけているということなのである。他に「春の夜の止まり木に待つもう一羽」がある。

春の雪少年像の笛に積む

名久井清流

〔俳句界〕 4月号・新作巻頭より

この「笛」は横笛であろうと推測する。すぐに融けて無くなってしまいそうな「春の雪」がうつつすらと積もっているのである。この「少年像」は雲の峰の下でも、秋風を纏っても映えるかと思う。が「春の雪」は圧巻の景であろうことは想像に難くない。

眼裏を去らぬ子猫の瞳かな

小杉伸一路

〔俳句界〕 4月号・自選30句より

作者の「眼裏」「子猫の瞳」に占められてしまっている。「子猫の瞳」の無垢な輝きを忘れられないということであろうか。それとも子ではあるが、野生を残した「瞳」の鋭さにたじろいでいるのであろうか。「去らぬ」を読者がどう読むかにかかっている。

船窓の冬青空の丸さかな

曾根新五郎

〔俳句界〕 4月号・雑詠欄より

窓枠を額縁にして丸く切り取られた冬の青空がありありと思ひ浮かぶ。筆者は、冬の青空の暖かみを感じるのだが、様々な鑑賞が成立するであろう。客観的な叙景句でありながら、作句の心情を想像させる句の奥深さが素晴らしい。



五月号の巻頭句

季音 雪 初音聞くほかに音なき奥の院 石井喜恵

季音 月 訪ふや雪の別れの銀閣寺 梅澤佐江

季音 花 浮雲へ向かひ澄ふむ実朝忌 曲淵徹雄

水明集 鉄瓶の猛る湯玉や寒の明け 菅原卓郎

鼓笛集 春の田の余白埋め行くトラクター 菅原卓郎

山紫集 春浅し向かう三軒空家なり 飯田忠男

俳誌望見 染谷風子

「くぢら」二〇二四年三月号 通巻一四二号

主宰 中尾公彦 発行所 東京都新宿区

平成二六年、中尾公彦が創刊、主宰として現在に至る。師系は能村研三、角川春樹。「心に響く言葉で、心に届く俳句を」を俳誌のモットーとしている。

巻頭の主宰詠「汚れなき空」十七句より三句。

年繩の太めを締めてをとこ神

蠟梅の空に汚れのなかりけり

見番所のきつね鳴くなり稲荷講

一句目、年繩は正月に門口・座敷に張りわたす注連縄だ。

をとこ神は素戔嗚尊か大国主命か。化粧回しを着けた横綱にも見える。二句目、芳潤な蠟梅の上に広がる新宿の清浄な空。新春を言祝ぐ一句である。三句目、神楽坂見番横丁に、見番所と隣接して伏見火防稲荷神社がある。鳴いているのは神社の狛狐か、見番所の芸者さんか。神楽坂らしい一句である。

副主宰工藤進氏の「百年の襷」十三句より、「神楽坂横丁・

昆沙門天・福参り吟行四句」の前書ある三句。

花街の寒の地に立つ箱提灯

黒塀に潜り戸日脚伸びにけり

狛犬は虎ぞ鬼は外福は内

神楽坂は江戸の粋を今も残す街である。一句目、客を見送

る仲居の箱提灯の灯が寒中の闇に冴えている。三句目、神楽坂昆沙門天は狛犬ではなく狛虎であり、破調が句意と響き合う。

「天鯨集」無鑑査同人三名三六句より共鳴句三句。

寒風や拳に宿る希求心 三木星童

命みな水の色なり淑気満つ 掛井広道

高らかに空へ乾杯鯨吼ゆ 宮崎ひろし

「金鯨集」同人四名三三句より共鳴句四句。

明日のこと明日にまかせて冬至風呂 中村能乃子

肩車いのちをのせて初詣 川原 正

いつだつて今がしあはせなずな粥 黒川あや

息白しわが魂は曙色 三木あゆみ

一句目、この心の余裕が素晴らしい。二句目、肩車の相手

はお孫さんか。「いのちをのせて」の表現が秀逸である。

「大洋集」同人十四名九八句より共鳴句三句。

マスクして予防の出来ぬ片思ひ 植村喜美子

声とほるくぢらの海の初句会 片居木栄

良き知らせ明日は届くと実千両 竹原美穂子

「海鳴集」同人二〇名二〇句より共鳴句二句。

なりはひに戻りし活気実千両 平田健作

病み伏せば母の面影白障子 片居木一江

全体を通して、都会的な洗練された自由闊達な句が多いと

感じた。「くぢら」の今後益益の発展を願ってやまない。

山本鬼之介 選

水明集

水煙の天女の肩に名残雪
春の風農夫の腰のラジオの音
初桜祢宜と巫女との昼休
巨匠落つ柩をつつむ涅槃雪
春風や秋篠川の水のたり

ミモザ咲く入江の里の海鼠壁
爪草をはづす媼の二月かな
卒業の袴凜凜しきヅカガール
貸舟の解かれぬ舳ひ忘れ雪
陽炎のカーブに軋む花電車

さいたま 池田珪子

伊奈 菅原卓郎

人ありてこそその里山鳥帰る
鳥帰る神社の森に別れ告げ
春泥を避けて子の手を握り締め
的はいま枝垂桜におほはれて
野遊びやゴムの弓矢的を射る

春泥を牛若のごと次男坊
朝市立たぬ輪島の空を鳥帰る
的確な子への説教春の雷
千円で願ひは数多伊勢参り
能登の地に更なる試練涅槃雪

をちこちの城の歴史ぞ春の宵
半襟に大正ロマン春日傘
露地裏の隅に寄せたる忘れ雪
貨物車の屋根にうつすら名残雪
門限のなくて二次会花の宴

大繩の掛け声「せーの」風光る
待ちわぶる旅の鞆に春シヨール
わが町は陽炎盛る野の向かう
荒東風や潮の匂ひの海通り
待合を隠すほど咲き白椿

さいたま 篠崎紀子

新 歴文

清水桂子

菅原真理

春炬燵結婚するかしないのか
徒然なる歩を止まらしむ土筆かな

さいたま 小林京子

小糠雨降る尼寺や桜餅

参道を的屋居並ぶ花巡り
春コート伊丹の空の別れかな

顔包みまた来年と雛しまふ
古民家の瓦の照りや梅香る
気に入りの器欠けをり春かなし
青柳を握り斃るる斬られ役
竜天に登る頃あひ海碧し

平塚 丸屋詠子

山笑ふ噴煙北に棚引けり

岡田宣子

うつすらと春泥ひかる夕明かり

さいたま 霜多光代

嬰兒の瞳に映る石鹼玉

強東風に向かひ氣を入れ石廊崎

春雷や旅人集ふ浅草寺

三月や彩が際立つマテイス展

鳥帰る彼方の戦火衰へず
流鏑馬の的射ぬきたる華の武者

青つづく空の信号帰る鳥

皆川更穂

寺町知子

鳥帰る瓦礫の街の空低く

身じろがぬ地蔵の笠や涅槃雪

磯祭皿を食み出す的鯛

銀鱗の尾鰭一閃うららけし

春の日やふと口の端にケセラセラ
さみどりに染まる指先木の芽風
ぎんねずの花穂は手の中猫柳
三月や土のふふめる庭景色
秋ヶ瀬の川面煌めき三月来

母の忌の帰路やはらかに涅槃雪

明日を待つ家並に雪の別れかな

風光る四谷見附の橋の上

崖下の駅にやうやう花のとき

老犬を抱き上ぐる夫花の陰

越谷 阿部幸代

本橋稀香

うたた寝は数分のはず春炬燵
お福分けてふ言葉懐し桜餅
春一番生簀の魚影翻る
ひもすがら胎動めきて春の海
すれ違ふ仁丹の香や荷風の忌

始球式の市長暴投揚雲雀

さいたま 森下山菜

先生のチョークはカーブ目借時
珍客に見せて喰はせて地蜂の子
連結貨車の二十三輛雪のひま
路の臺星の出産お待ちあれ

弘前の満開の花天蓋に
焼柴螺香を引き寄する浜の店
踊り子の足の華やぎ春舞台
野遊びの弁当ねらふからすの日
天仰ぎ開花を待つや紫木蓮

さいたま 山岸久美子

少年の夢は水色土筆伸ぶ

綿引まりこ

活きの良い若鮎掴む粋な奴

千坂平通

春の雲ホットミルクの薄き膜
春泥に待てのポーズの小犬かな
欄干に粋な女の春日傘
三つ編みを空へ放りて卒業す

若鮎や銀の背びれが宙を舞ふ
ものの芽や命の宿る森の中
名誉ある知事賞受くる春書展
跡目なき解体工事仏の座

太宰府の梅花の宴世を拓く

元田亮一

令和にも昭和を残す里桜

吉川拓真

春めくや薄手のシャツで走り出す
出立の時迫りをり星朧
彷徨へば上野の駅に啄木忌
雨上がり並び見上ぐる春の虹

消毒の空きの容器や春の宵
言の葉や春は明るく飛び交ひて
菜種梅雨路上に寝たる人の無し
いつからか人は髪染め落椿

警策の静寂に響く余寒かな

反町 修

絵馬鳴らす二月の風の文殊堂

熊谷 越田栄子

壺焼や演歌を耳に手酌酒
蒼穹や物芽の囲む忠魂碑
ねんねしな水子地蔵の風車
ものの芽や自然の息吹いつせいに

感性の触れ合ふ君よ花ミモザ
窯変の予期せぬ黄色ミモザ咲く
卒業や子の成長の眩しくて
人生の恩師と出逢ひ卒業す

ふるさとへ目立ち過ぎたる春シヨール
春シヨール飛ばされてゆく畦の婆
托鉢の僧が陽炎割り進む
生粋や法被揃うて江戸桜
栄螺焼くその手が踊るクラス会

さいたま 梅澤輝翠

オムレツの姿整ひ春うれし
暖かやウォーキングに杖二本
教室の窓際の席暖かし
ひたすらに一人畑打つ疲れかな
春暁の産声を聞く安堵かな

若狭 山崎郁子

壺焼の噴く潮と香やこれぞ海
陽炎を割つて駆け抜くハイセイコー
信濃路や風に膨らむ春シヨール
蛇穴を出づ守り神だと囃されて
素潜りの海女の蹴る足光る潮

西幅公子

六地藏六の面差し花の里
歳月の一本桜や旧街道
振れ花彩はないろを雫に雨上る
倭の国の男の美学花吹雪
結願の宿坊ひとり春の星

さいたま 香田裕誌

水温み光り輝く川面かな
水温み魚釣り人が二三人
春あらし能登半島の被災地を
朝日受け首伸し咲く福寿草
立春や牛歩で今年一年を

杉戸 佐々木史女

涅槃雪よもやと思ふ今朝の庭
那須岳の秘湯へ向かひ雪の果
「舟唄」はここ限りかな別れ雪
七半のサイドカー行く春日和
春よ春吾が境涯にも春よこい

飯田忠男

朝戸風に心せずとも入る余寒
津波きて海苔棚を見て海を見て
ささらぎの遠忌追責の句座に着く
水溜り端より乾く日永かな
鈍色の空を潜りて雁帰る

さいたま 加藤でん治

あちこちの募金活動母子草
もどかしや金縛りなる春の風邪
瀬戸内を望む畑山黄水仙
被災地の畦に一輪黄水仙
東風吹くやへりコプターの堪へたる

山戸美子

水脈を切る棹の滴に水温む
読みかけの乱歩二冊や春炬燵
春炬燵三味にたゆたふ夢心地
魚群追ふ強東風の中鷗舞ふ
耳朶に鳴る「悪魔のトリル」春炬燵

利根 倉田星歩

雲雀東風背筋も伸びて空高し
しなやかに強東風流す樹々のあり
陽炎や曾祖父の墓探す屋
人待ちのひと陽炎の中に立ち
ふつつつと壺焼香る釧路の夜

さいたま 竹澤和子

目鼻なき紙の雛の笑まひかな
まなざしはもう母のもの孕み鹿
細き脚に重き身を乗せ春の鹿
眼科医のとなりは耳鼻科春盛り
ひざ笑ふ春一番の吹く朝に

枚方 寺内洋子

春耕の心ほどくるエンジン音
散村の休耕田や春半ば
春祭を待つ少年の太鼓の譜
花の雨籠もる囃子の遠音かな
駆け比べ転ぶ野みちの鼓草

若狭 岡本祥子

生きる術また一つ増え卒業す
宝箱ぎゆうぎゆうにして卒業歌
囀りて拳動不審の我と犬
囀りて枝へ空へと風流る
囀や森は一気にざわめきて

さいたま 緒方みき子

ふらここを漕げど漕げども元の場合
春暁や富士の腕に抱かれり
軒先に若布干さるる浜の宿
制服の採寸帰り春麗
澁刺たる乙女三人花の宴

松村笑風

春の日よフルマラソンのゴールまで
手のひらに太古の香る木の芽かな
雨やんで雨の滴る木の芽かな
早春の食卓賑はすちらし寿司
静寂の無き世春眠起こさるる

平野 楽うら
(久夫改め)

由良川のローカル電車春の海
春の海由良の駅舎は帆のかたち
由良の地の安寿厨子王花の雨
舞鶴の海自カレーや春の海
ポケットに顔彩セット春の旅

畠中八重子

春灯バンドネオンの余韻なほ

母と子の尽きぬ語らひ春灯

揺り椅子を猫が揺らして春灯

かぎろひて手を振る母はフラダンス

子等走る向う正面陽炎へり

さいたま 森 和子

小型船の浮かぶマリナー風光る

菩薩立つ古刹への道花盛り

海見ゆる丘に群生黄水仙

梅東風や整ひ終はる竹林を

病院の待合室や春しぐれ

さいたま 森下美智枝

山笑ふ歩き始めの児も笑ふ

留守居の身置き所なく日永かな

独言し書棚を漁る日永かな

しやばん玉何処へ行くやら垣越えて

朧夜の体内時計不調なり

綿貫ひさの

南国へ越すと云ふ友梅真白

隣人の引つ越し淋し弥生尽

南国の友より葉書山笑ふ

独り居の遅き夕餉や遠蛙

堤にて友と落ち合ふ桜まじ

高原 和子

内裏雛に思ひは負けぬ吊し雛

人形を仕舞ひて今日の余寒かな

朧夜やホールを満たすピアノニツシモ

温燭でビバルディ聴く彼岸の夜

ピタリ止む予報頼もし春驟雨

駒谷行雄

卒業や出席番号けふ限り

背を丸め眉ととのふる日永かな

これ以上なき丸なりや葱坊主

夫婦して大の字に寝ぬ春の昼

たまさかに病を忘れ鶯餅

川 口 新井のり子

水底の魚は動かさず春の川

ミモザ咲く住む人もなき家の庭

古稀すぎて春耕の田に降りたちぬ

花さがし春満月を歩く夜

曲がるたび響き増したる春の川

持谷 寿夫

砂を撒き花を舞はせて桜東風

陽炎に占拠されたるバス停よ

陽炎の渋滞ぬけて道の駅

壺焼は肝まで食うてこそそのあて

焼きさざえ好み譲らぬ身しまり

さいたま 小川 洋子

牡丹の芽古刹にのこる葵紋

さいたま 森美枝子

湧水に壬生菜をほぐす寺男

節くれを誇る棟梁草の餅

さいたま 大熊健司

春一番ビルの谷間に籤売場

シャンソンの流るる厨目刺焼く

いさかひの妻より貰ふ春の風邪

船頭の太き二の腕東風の舟

吊革の揺るるにまかせ春の風邪

陽炎の中に少年逆上がり

真四角に想ひ出隠す春炬燵

吉川 杉浦千祐

恋心ただほあほあと桜餅

花筵一升瓶をどんと置く

湯浅 和

悲し気な歌謎めきぬ雛祭

春の宵軒に自慢の杉の玉

三月や袴の乙女駅に咲く

借景に天守閣ある梅見かな

春雷や寂しさすとん胸に落つ

下萌や納屋に出を待つ鋏と鋤

ぼうたんの沈みゆく恋結び文

草青む鳩の寄り来る木のベンチ

所沢 関根千恵

蛭田律子

星涼し過去は遠くて近くある

から松の掻き混ぜる空余寒あり

雨の日も晴れの日も有る青林檎

鈴なりの白れん雲に取り込まれ

初夏の風音楽室のブラームス

花見とて山門二つ突進す

夢が濡れ愛が濡れるる水中花

参道に多言語はじけ春光る

ラーメンをシエアする女子や春の峰

さいたま 秋谷風舎

大阪 遠藤人美

昼食へばついうたたねす山笑ふ

山桜山が生みたる淡き色

絶巔に春の泥とは思はざる

春光に身を乗り出せる車掌かな

春泥をつい避ける吾避けぬ犬

慕はしき声まで似たる春シヨール

花の宴シャンパンは気の抜けぬうち

借景の芽吹きいちどきぼんぼん

花の宴シャンパンは気の抜けぬうち

露味噲の至福や露を刻む時

花の宴シャンパンは気の抜けぬうち

似た質の集まる浜の春灯

小さき部屋母から届く夏布団
山門の脇を照らすや著莪の花
夏めく日母の鼻歌聞こゆる庭
夏めくやペダル輕輕走る道
夏めく日畔に腰かけ仰ぐ空

若狭 佐野友夏

花の坂自転車三台通りけり
花曇温めの酒に焼きするめ
もういいかいまだだよと春の猫
けんかあり知らんぷりあり猫の恋
球春ぞ応援団長風を呼ぶ

さいたま 門真宏治

石鹼玉貴方を入れて光りけり
色変はりじいつと見つめ石鹼玉
石鹼玉歌に合はせて出でにけり
山笑ふ仄かな風に誘はれて
山笑ふスマホクーボン初使用

さいたま 小駒さち子

賽の目が決むる人生風車
蒲公英や校歌の響く体育館
古民家の柱時計や夜半の春
釣銭に混じる外貨や春の旅
春風や羽あるものは飛び立てり

石関六弦

道草を誘ふかをりや沈丁花
春の夜優しき友の勘違ひ
春一日つひ口遊む桜坂
桜草ロンパースの背愛でてをり
桃色にカーペットのやう芝桜

東京 畑宮栄子

春の雨眠る大地をそつと撫で
ちよつと良き明日のために種をまく
祝膳の主役つとむる螢鳥賊
恋猫やマリリンモンロー追ひかくる
落椿老の残り火搔き立つる

和歌山 嶋田洋子

春寒や追分宿の道祖神
ルーティンの朝の支度や寒明くる
如月や生まるるものと散るものと
春の雪能登の海猫啼き止まず
三月や小学校の習字展

さいたま 播磨 進

式場の外まで届く卒業歌
校長の祝辞に涙卒業生
酩酊の顔に強東風通り過ぐ
飯蛸の煮付の厨のぞく孫
飯蛸や図鑑を開き学ぶ婆

さいたま 武田重子

海中に竜宮ありや春の海
能登の地に明かり灯さむ春岬
春点前自身の心もてなして
舞殿の巫女の緋袴風光る
非を鳴らす野党にエール遠蛙

さいたま 羽島秀子

もの忘れひどく可笑しや春愁ひ
春時雨忘れおかるる女傘
旅の宿朧月夜の甘やかさ
寂しさを託ち嘘つく春の雨
光溢ふるる沼に張力雁帰る

さいたま 小山あつ子

光悦忌玻璃越し愛づる喫茶碗
高窓に佐保姫過る眠き午後
潮騒の心地良きかな春の海
落し角繩文人を重ね見む
強風に弱気飛ばして二月尽

岡田芳春

東京 深沢りこ

日の本の窓の棧にも黄砂来る
黄砂舞ふ只中車疾走す
黄なる砂遙かな地より吹き来たる
影連れて川辺散歩す春陽浴び
空見上げコップ捧げん白木蓮

晚酌やからし菜は湯に通すだけ
桜待つ乙女の像は天を指す
冴返る広き公園人疎ら
七色に映ゆる富士の嶺石罨玉
一献と誘ひ来る友春の雷

鈴木藻好

奥入瀬のにぎはふ木道山笑ふ
水仙の白をつないで散歩道
いちご狩少女の笑顔輝きぬ
蓬つみ渡しの舟の行き帰り
蝌蚪のひも亀も緋鯉も友達に

さいたま 山下ユリ子

急ありや一直線に蜂の飛ぶ
冒險の予感はらむや黄砂吹く
霾や海に溶けゆく瀬戸の島
鉄柵に指で名を書く霾ぐもり
密やかな馬の瞬き霾れり

東京 山中いちい

貝拾ふ妣の面影春の海

鈴木香音子

公園の奏づる提琴春来る
落し角見回す鹿はうなだれて
まさをなる空をとりこむ春の海
白梅や黒老木に過る日よき

担任をあだなで呼びて卒業す
卒業や親友は皆晴れ女
卒業式総代の声一段と
卒業期闘病中らし友の席
嘖や口を尖らせ抱つこの子

所 沢 飯室夏江

一つかみ庭の路煮て春を喰ふ
「ただいま」の声待ち上ぐる露の臺
啓蟄や息子は気楽にインド旅
枯蟻螂命つなげる杖一本
春の雨古きガイドブック閉づ

藤 沢 小島喜代子

閏日に吾子生まれしや山笑ふ
石鹼玉吹けば刹那も球体に
しやぼん玉飛びて輝き一弾指
シルバー席空気を読めぬ新入生
一吹の世の泡沫や石鹼玉

さいたま 糸井しるく

春泥やママはおしやべり子は団子
春泥や足から手から顔までも
猫の恋どちら向いても雑種なり
土筆摘むままごと遊びは別の草
道着干す最後の試合に春の雷

さいたま 川島夕峰

うららかや風のむくまま気球船
駄菓子屋に子らの集まるしやぼん玉
雲梯へ飛ばす親子のしやぼん玉
免許証の更新最後山笑ふ
鳥達に撓ふ梢や山笑ふ

樋口元美

菜の花や堤渡りて毛野の風
墓参り水ちやぶちやぶと彼岸かな
日暮れ時火の恋しくて冴返る
大人びて背筋正しく卒業生
太陽光パネルまぶしく咲く桜

藤 岡 榊原聰子

バイエルの調子はづれてしやぼん玉
日記には書かぬ出来事しやぼん玉
この星も相似形なり石鹼玉
山笑ふ瀬音はワルツクレッシェンド
新しき杖の頼もし山笑ふ

横山礼子

風しづか声さはやかに初音かな
六年の思ひ出多きランドセル
太陽に向つて笑ふ露のたう
父と母言葉かはして彼岸晴れ
春の陽の雀集まる小さき庭

加藤ナヲ子

月曜の遅延電車や花曇
花曇そろり値を見る陶器市
来し道は紆余曲折や花曇
春の宵ピアノに指揮に反田氏は
退職し十八切符光る風

さいたま 木谷葉子

色褪せど来し方語らむ夫婦びな
古ひひなみんな集めて夕まつり
母の手をしつかと握り入園児
夕桜無口になりて通り抜け
山桜明日は開くか空仰ぐ

東京 柳父はる

うららかや太き柱の手斧跡
猫の恋ラーメンする夜勤明け
友病めり峠棚田の穀雨かな
庚申塚の屋根の緑青花曇
うららけし鍼灸院の十五分

石井直子

散り椿ご苦労様と声をかけ
三寒の四温を迎へ前を向く
風匂ふ春の訪れ嬉しげに
満開の桜を夢見歩く道
氷雨降る闇の中から朝日かな

桐山遊童

風を切るマラソン人や涅槃西風
人気カフェ目指し銀ブラ花曇
恋猫の帰宅を告ぐる甘え声
飼主の脚に恋する春の猫
春の雨まだ明けやらぬ旅の宿

三浦真由美

ふんどう豆喜び勇んで飛び立ちぬ
路地すみれ踏まれて強く生きるなり
堇咲く戦なき世をつくれぬか
雛祭り仲間増えたる句会なり
餌を求むる野鳥の声や春の朝

和歌山 南條きわゑ

故里を離れり花咲き初むる頃
風光る太極拳の剣の舞ひ
新しき命の鼓動風光る
父母旅立ちし鎌倉処々に山桜
紅椿重々咲きて鳩憩ふ

宮代 関谷多美子

峠茶屋日裏の先の春の海
櫓を置きて微睡むほどの春の海
落し角非を飾りたる吾が浮き世
春の灯やマニキュア塗りて恋を知り

草加 持永喜夫

山笑ふ「鐘撞き代は百円」と
岩岳にカフェの建ちたり山笑ふ
しやぼん玉艶葉に留まり輝けり
うたかたの時の行方や石鹼玉

さいたま 前田夏野

郁子の花実も見届けて男坂
古里は気概住み地は舞台春よ春
紫陽花や住み地鎌倉色かへて
枕辺に書物並べて梅雨のどか

藤沢 藤田寛二

寒暖激しダイバー泣かせの春の海
貝耳に当つれば春の海の唄
オール置きあそぶ小舟や春の海
棒持ちて毀す庭木の鴉の巢

北出久美子

春の泥下校児童の声高し
土筆胞子友に送られ風に乗る
急ぎ買ふ老夫仕込の彼岸餅

さいたま 篠原さよ子

蒲公英や心和らげ手術待つ
はだれ雪掃ひて腰を伸ばしをり
本棚の埃を払ふ新学期
斑雪揺れて見つかるかくれんぼ

小田三茅

※主宰が添削をしている句があります。
提出した句を思い出して勉強して下さい。

ふらここの夜風に語らふ乙女かな
恋猫のほほ擦り寄するマーキング
店先に咲き急ぐなよ風信子
春猫に見守られつつ接骨院

大阪 飯塚智恵子

春灯や新入社員の研究室
式部卿秘めてたわむる陽炎が
春灯やなじみのカフェのママ紅を
陽炎やブランコ漕いで老夫婦

さいたま 落合和枝

作品評

山本鬼之介

水煙の天女の肩に名残雪 池田珪子

寺院にある塔の最上部の屋頂にある装飾物をひとまとめにしたのが相輪で、水煙は相輪の上から三番目にあり、相輪の中で最も眼を引く美しい装飾品である。

さて、掲句の水煙ほどの寺院の塔にあるものだろうか。勉強のため調べてみたところ、一三〇〇年以上も前の白鳳文化が華開いた奈良時代に薬師寺が建立され、その伽藍にある東塔の相輪の水煙が二四体の飛天で形成されていることから、掲句の天女が薬師寺東塔の水煙の飛天であろうとの思いに至った。

名残雪は、雪のシーズンを過ぎて春を迎え、もう雪は降らないだろうと思っている頃に降る雪。冷たさよりも愛惜の念を覚える雪なのではないかと思う。「天女の肩に」が、そのイメージを膨らませている。

陽炎のカーブに軋む花電車 菅原卓郎

花電車は今の若者や子供には理解出来ない物であろうが、それとは対照的に、老者には脳裏に生き続けている華やかな思い出だと思う。昭和初期に行われた関東大震災復興祝賀パレードで花電車が走ったことを親から聞いた記憶があるが、実際自分の目で見たのは、中学生の頃、大銀座祭で都電に飾りつけられた花電車の華やかな姿であった。昭和の戦後の復興期に、政令指定都市を中心に主要都市を走る路面電車に華やかな装飾を施した花電車が、それぞれの街の祭や主要行事に活躍していた。路面電車の路線廃止に伴い、花電車も姿を消していったが、函館市や広島市・長崎市では今でもたまに運行されることがあるとのこと。

筆者が思うに、掲出句は、都営交通百周年の祝賀行事の時の都電荒川線の花電車をモデルにしたものではなからうか。JR王子駅前を出た花電車が明治通りを左折して飛鳥山の坂を上り、右折して専用軌道に入る。そこに立ち上る陽炎を切り裂き軋み音を立てて走る花電車の姿。「東京さくらトラム」の愛称で活躍している荒川線の花電車の再現を待ち望む。

人ありてこそその里山鳥帰る 篠崎紀子

人里の近くにあつて、住人の暮らしと密接に結びついている山や森林のことを意味する「里山」であり、人はそこからたき木や山菜・茸など生活に密着したものを得、そのお返し

に小まめに人手をかけて里山を整備している。人と里山との心の通い合いがあるから里山が美しい景色として人の心に響いてくるのだと思う。そういう里山を傭にしている渡り鳥も人と同じ気持なのだろう。里山に別れを惜しみつつ、上空を数回旋回して空の彼方へ去ってゆく。

春泥を牛若のごと次男坊 新 曆文

現今では、メイン通りは勿論のこと、細い路地や農道などが舗装されているので、春泥の泥濘んだ道に出会う機会はごく稀なことだが、たまたまそういう場所に行き当たると、履物を汚さぬように通り抜けるのに苦労する。この少年は、躊躇することなくひらりひらりと身を躲して泥濘んだ道を通過する。京の五条大橋で巨漢武蔵坊弁慶を翻弄した牛若丸のような軽快な動作である。おっとり育った長男とは正反対に、目端の利く次男坊の特質を見事に表した俳句である。

半襟に大正ロマン 春日傘 清水桂子

明治と昭和の間にあった大正は、その期間が短く存在感が薄いようにも思えるが、実際は独特な文化を生み出した時代であったようだ。「大正ロマン」を端的に表せば、大正時代の趣や文化の内容を示す言葉であり、この時代に新しい文芸・絵画・音楽・演劇などの芸術が広まり、また、洋装化の

促進や、女性が和服にパラソル、男性が和服にカンカン帽など洋折衷の服装の出現で、人々に新しい時代の到来を実感させた。

陽射しの強い春の某日、作者が和服に日傘を差した女性と行き合い、そのひとが着ている着物の半襟に現代とは違ったモダンな趣を感じた。日傘が大正ロマンを回帰させる引き金になったのかも知れない。

待合を隠すほど咲き白椿 菅原真理

作者が「待合」を俳句の題材にしたことに驚きつつ興味を抱いた。この場合の待合は、「待合茶屋」の意であると察するから、そこは実生活を離れた粋な場所であり、いろいろなことが類推される。この待合に接して大きな白椿の木があり、沢山の花を咲かせている。赤や紅ではなく、どちらかと言うとその場所と相反するような白椿であることに興味が湧く。

春炬燵結婚するかしないのか 小林京子

春とはいえ肌寒い日もあり、なかなか仕舞えないのが春炬燵で、ついつい五月のゴールデンウィーク直前まで部屋にのさばっていることもある。春の某日、交際相手の男を娘と両親が迎え、炬燵を囲んで談笑している。親は、てっきり結婚の許可を得るために訪れたと思っっているのに一向にその気配

がなく、どうでもよい話が続いている。『どうするんだ』と叫びたくなる両親。煮え切らない男が多くなつた昨今の世相を、春炬燵も嘆いているのではと思わせる面白味がある。

嬰兒の瞳に映る石鱈玉 岡田宣子

やつと立てるようになった赤ん坊が、青空へ飛んでゆく石鱈玉を見てきゃっきやと嬉しげに笑い声を立てている。母親や姉姉も一緒になって麗らかな午後の時間が過ぎてゆく。大きく見開いた赤児の眼に映る石鱈玉は、実に神秘的で美しい。

磯祭皿を食み出す鯛 皆川更穂

「磯祭」は、歳時記で「磯遊び」の傍題として記されているが、広辞苑によれば、「海辺の村で、三月三日の節句に女性たちが浜に集まり、草餅や海産物を食べたり潮干狩をして遊ぶ風習。」と説明されている。この解説に従つてこの句を鑑賞すると、たまたま獲れた大きな鯛（まとうだい）を囲んでの盛大な宴席の様子が窺える。それ用に特大の皿を用意したが、収まりきれぬ大物で、宴会の盛り上がり疑いなしである。

明日を待つ家並に雪の別れかな 阿部幸代

家人が寝静まつた時刻の住宅地。軒を連ねる家々の屋根に、この春の締め括りの雪が音もなく降り注いでいる。月の無い

雪空の下にぼうつと霞んだように見える屋根・屋根・屋根。春ならではの温みの中に哀愁を包み込んだ夜景が広がり、家ごとに違った明日を迎えようとしている。

竜天に登る頃あひ海碧し 丸屋詠子

まことに厄介な季語に挑んだ作者の勇気を、先ず誉めるところ。この季語が載っている歳時記は少ないし、その解説を読んでも理解が困難である。「竜が春分に天に登る」という説明から、そのタイミングを「頃あひ」と表現し、紺碧の海に居る竜を思い描いたのである。いま作者の脳中に勢いよく天へ登つてゆく竜の雄姿が描かれている。

一斉に湖を逆立て鳥帰る 霜多光代

秋から冬にかけて北の大陸から日本に渡つてきた白鳥や雁、そして鴨などの水鳥が、春になって次々と大陸を目指して帰つてゆく。鳥の群れが次々に湖面を掻いて飛び立つ様は実に壮観で、掲句の表現がぴったりである。

さみどりに染まる指先木の芽風 寺町知子

春になって様々な樹木に芽が吹き出す「木の芽」である。まさに春ならではの清々しい趣で、芽吹いた木木の間を渡つてきた風によつて、指先までもが若草や若葉のような初々しい色に染まつてゆくという詠み方が実に佳い。

すれ違ふ仁丹の香や荷風の忌 本橋稀香

昭和を語る上で欠かすことの出来ない物の一つが「仁丹」ではないかと思う。御守りのように常に仁丹を携行し、時々無造作に口に放り込んでいる人をその時代によく見掛けた。仁丹に如何なる薬効があるのか、筆者には不明なことであったが、愛用者に近寄ると独特の仁丹臭を見舞われた。さて、仁丹の愛用者が今も居て、擦れ違つた作者に懐かしさを覚えさせたのであろうか。仁丹と荷風忌がどの程度結びついているのかは判らぬが、昭和61年まで浅草の国際通りと雷門通りの交差点近くに建っていた仁丹塔もその一つかと思う。

先生のチヨークはカーブ目借時 森下山菜

水明誌の毎号で山菜俳句を楽しませてもらっているが、この句も実に楽しく面白い。目借時ともなれば、教師の声に眠気を誘われて船を漕ぐ生徒が増えるのも当然であらう。教師も人の子、堂々とやっている奴にはそれなりの報復手段を取る。野球好きの先生なのか、狙いを定めてチヨークを投げる。変化球のカーブが見事に決まり生徒のおでこに命中。教室に爆笑が起きる。

春の雲ホットミルクの薄き膜 綿引まりこ

朝方喫茶店に入り、トーストとホットミルクを注文した。スプーンにミルクの薄い膜が張り付く。さして問題視することではなからうが、ホットミルクに生じる膜が嫌いな人にとっては、快い朝の気分を害することになるかも知れない膜である。折しも空に浮かぶ綿菓子のような雲。空にも薄い膜が貼られているような気がしてきた。

出立の時迫りをり星隴 元田亮一

夜明け前の夜空である。潤みを帯びた戸外の景と星。早立ちして大事な用事を果たすために目的地へ向かう。煌めく星空であれば気分が高揚するのだがと思いつつ、とにかく頑張ろうと時計を見る。

蒼穹や物芽の囲む忠魂碑 反町修

忠魂碑は、明治維新以後の日清戦争や日露戦争をはじめとする戦争や事変に出征して戦死した地域の兵士の魂を安らげるために建てられた記念碑である。寺社の境内や公園など、人の集まる場所に在るものが多い。

さて、本句の忠魂碑は何処に建てられているものか。晴れわたつた蒼天の下、一斉に芽を吹き出した木々や草花に囲まれて、忠魂碑に安らかな時が流れてゆく。

水琴窟

(四月号鑑賞)

池田雅夫

来賓の長き祝辞を絶つ噺

木村小麦

「来賓」に限らず「祝辞」というものはないが長いものである。話す側は佳境に入るものの、聞いている側はその内容が頭に入らない。ただひたすら終るのを待つのみ。そんなとき誰かが「長き祝辞を絶つ噺」をしたのだ。愉快、愉快。

百歳をふはり跳び越え年迎ふ

森美枝子

長寿の象徴である「百歳」を迎えた新年。何の苦勞もなく淡々と過ごす百歳の日々。規則正しい食生活こそ長寿の秘訣であるという気持ちがあふはり跳び越えに表われている。その身軽さ、氣負いのなさを見習いたいものである。

ふるさととは潮汐の色浅蜷汁

関根千恵

「潮汐」は、一日に二回ある満潮と干潮のこと。干満の差が最も大きくなる三月。はるか沖までかすむ干潟は壮大である。「浅蜷汁」に故郷の景を思い浮かべているのであろう。

高々と梯子を架けて出初かな

大熊健司

東京・晴海埠頭などにおいて行なわれる出初式。いなせな人々が消火演習や梯子乗りなどを行なう。その梯子の曲乗りは見ごたえのある花形で観衆の的となっている。「架けて」を推敲し、あれこれと工夫することも楽しみである。

初参 八方睨む龍天井

北山建治郎

今年は十二支の五番目「辰」の年。象徴的に「龍」が用いられている。「八方睨み」の異名をもつ京都・相国寺の龍など、神社仏閣に龍の絵や彫り物が多いのは、雨や水を司る龍神として、また、仏法を守る神とされているからである。

のんびりと和む読み手の歌留多かな

倉田星歩

正月のだんらん「歌留多」を楽しんでいるのだらう。百人一首の「歌かるた」や「いろはかるた」など、さまざまである。「のんびりと」した「読み手」の声や仕草で和んでいる様子が窺うことができる。正月の楽しさが表われている。

大櫓揺れず靡かず寒に入る

門真宏治

小寒から節分までを寒といい、その入るのを「寒の入」という。厳冬の大気が重くのしかかってくる。御神木であろうか、空に広がる枝は堂々としていて風格さえ感じられる。

鰯酒に火男顔がおつとつと 森 和子

熱く爛をした「鰯酒」に、「火男」のように口を尖らせて近づけている。なみなみと注がれた杯に、おもわず「おつとつ」と啜っているのだ。ひょうきん呑んべえをこっけいに描いている。鰯酒の鰯がいつそう酒を煽っているようだ。

それぞれの気力集まり初句会 榊原聰子

新年早々に開かれた「初句会」。「それぞれの気力」で臨んでいる。俳句に対する意気、姿勢が強く感じられる。その力がずっと持続することを願わずにはいられない。きつとたくさんの佳句が披露されたことであろう。

三が日中華そば屋のうすあかり 飯塚智恵子

おせち料理にお屠蘇と、休む間もなく飲食を続けた「三が日」。お腹の負担を感じるころ。中華そばのさっぱりした味がこいしくなったのだ。餅や肉料理などの重たさに比べ、その軽さを「中華そば屋のうすあかり」で言い表わしている。

街灯の切り出す三角小雪散る 山中いちい

何もかも静まり返った雪の夜。「街灯」だけが無表情に灯っている。裸電球であろう。鋭角にすぼんだ笠に照らし出される三角形。そこだけを「切り出す」と巧みに詠んでいる。

寒鴉最寄の駅のない暮し 山下ユリ子

街なかでも騒がしい鴉。しかし、そこは「最寄の駅のない暮し」の、穏やかで静かな町なのである。そんな暮しにとけ込むように鴉が鳴いている。餌の少ない寒中を堪える姿が人間に重なる。何もかも便利な現代社会を諷刺している。

大初日甲板溢るる銀飛沫 持永喜夫

大海原を航行する船。休みなく稼働する船にも新しい年がやってきた。「甲板」に出て「初日」を拜んでいる。洋上の初日はことさら大きい。荒波の「飛沫」が甲板を越えてきた。初日に照らされた飛沫が銀色に輝いている。

剥き出しの命のかたち冬木立つ 横山礼子

枯木とちがい、「冬木」は宮々として力を蓄えていて、木の生命力が感じられる。「剥き出しの命のかたち」には葉を落とした梢の一本一本の力強さが表われている。離れたところから見ると「冬木」自体が「命のかたち」に見えるのだ。

東海道行つたり来たり春職場 藤田寛二

藤沢在住の氏。通勤に「東海道」を通っているのだろう。「春職場」の新しい言葉が印象的だ。「行つたり来たり」には毎日の忙しさにも春の明るい希望が表われている。

大村節代 選

鼓
笛
集

一人旅終へて帰る子弥生尽
忘れ物してきたやうな春の果
庭下駄にひと休みして散る桜

清水桂子

春昼や活気溢るる中華街
暮の春ライトに深む煉瓦倉庫
絢爛たる港の夜景宵の春

岡田宣子

逃げ水やあの世へ誘ふ夢の友
行く春も個室ベッドを見舞ふ酒徒
改札は駅長ひとり燕来る

新 曆文

そば濡れて鴉も鳴かぬ菜種梅雨
修験者の柏手二つ山に入る
入相に八重山吹も領きぬ

飯田忠男

山の神の寝姿隠す春霞
立ち竦む吾子のデビュウや磯遊
子守蛸うつらうつらと壺の中

小林京子

方言の飛び交ふ畑や茄子もぎり
膳囲む筍飯に子は呵呵と
香りふと想ふ人あり月見草

篠崎紀子

芽柳の揺るる銀座やランチどき
用水は解かれし帯か花筏
老若の母の合唱夏は来ぬ

杉浦千祐

昨夜の雨軒端に余寒残しけり
はからずも馬の嘶く万愚節
悪びれず糞落しゐる燕の子

加藤でん治

青空に穂高は白き八重桜
誕生の仔馬の立てり都井岬
待ちに待ち一気に萌ゆる春の草

西幅公子

北国の春は遅しと友の文
春愁や整理整頓ままならず
独り居の夕暮時や春愁

高原和子

野遊びの腕白坊主鬼ごっこ
赤ん坊ひよいと持ち上げ夏祭
艶やかに花魁道中花吹雪

厨より耳を傾け聴く初音
姉妹はお揃ひの服入園式
夏近し目覚まし五分進めをり

春風に乗せてにつこり大ホーマー
真昼間のさへづり地鳴き耳映し
君と僕同期のさくら今何処

麗かや名もなき花も土手にあり
八重桜青き瞳が見上げをる
ゆつくりと対の軽鳴あとを追ふ

選りすぐり身を振りもぐ夏蜜柑
出し抜けに筍二本貰ひ受く
抗ふや駐車場生ふ芝桜

桃花咲く一日太極拳大会
静かなる熱気花時デッサン会
門の灯にいよよ艶やか八重桜

佐藤克之

樋口元美

安倍弘夫

畑宮栄子

篠原さよ子

関谷多美子

鼓笛集作品評

大村節代

庭下駄にひと休みして散る桜

清水桂子

ひと休みしているのは、作者であろうか、桜であろうかとふと思つたが、やはり桜であろう。はらはらと散る桜の花びらが、庭下駄に付いている様を、ちよつと休んでいると、詩的に表現されて、桜の花びらも、さぞ満足であろう。

春昼や活気溢るる中華街

岡田宣子

横浜の中華街や赤煉瓦倉庫あたりを訪れた作者。中華街は日本で無いような異国情緒にあふれている。あの辺りを散策した事のある人も無い人も、景が浮ぶ事だろう。

改札は駅長ひとり燕来る

新 暦文

中七の駅長ひとりで、もうすぐ無人駅になりそうな駅だろうと想像する。春になると、忘れずに燕が飛来して、たまたま利用する乗客も、ほのぼのと燕を見上げている。

駅長さんが頑張っている駅も無人駅になって、やがて廃線にならない様にと祈る。

私の好きな一句（自句自解）

菅原卓郎

夏きざす阿吽でくぐる縄のれん

老齡の男二人が、押し黙りながらのれんを掻い潜る。やや汗ばんだ身体にはビールが最適だ。先ずは乾杯。徐々に会話も弾んでくる。次は何呑もうか。日本酒？ 焼酎？ 話題は持病自慢に移る。酒好きの年よりの他愛もない午後の一と時です。

水明通信

趣味とクラスメイ卜

寺内洋子

「学校時代もつと国語の勉強しといたらよかつた」はY子。「あのテストだけは洋子さんに勝てなんだ」はR男。高校卒業一〇数年後からだろうか。毎年クラス会をしてきた。前記の言葉のある年のクラス会でY子とR男が私に言った。

R男の言うあのテストとは中間や期末のことではなく、国語の読み書きに特化された年一回の全校共通テストのこと。テスト範囲がある筈もなく、教科書に載つていない難読漢字も数多くあつた。終わると上位一〇〇番全校生千人弱）までの氏名とクラスが職員室の前の廊下に貼り出される。

クラス全体の席順（全教科）での私は10番以内には一度しか入つたことがなく、よくて10番台半ばから11番台で、理科系でヤマに（当たり）のあるなしが順位の決め手という。可もなく不可もない平凡な成績だつた。しかしこの全校生対象のテストの読み書きテストでは3年間ずっと一桁台前半だつた。

クラス内の成績で常にトップ争いをしてきたY子の前述の言葉は、私と私の親友M子が長年俳句と短歌を続けたのを知ったときのクラス会で分かつた。この一言で彼女には俳句も短歌も無理だと分かつた。ややこしい物理の理論でも教科書の中味をしっかりと覚えさえしたら（記憶力）。大事ではあるが、いい成績は取れる（負け惜しみかも）。しかし覚えるだけ成績は物理学者にはなれないと言ふ事が彼女には理解できないものではなかつた。万葉集、古今和歌集等の和歌やその作者を正確に覚えたからと言つて和歌や短歌が作れたりもしない。そう言う授業ではなかつた。そうであつたとしても作れるかどうかは別問題。

R男の感想には多少の口惜しさが含まれていたが、素直に他者を認めるところがある。一斉テストで私が彼らより好成績だつたのは単に図書館、街の本屋（あの頃はあつた）、兄の書棚の本をやたら読み漁つていたからだろう。

俳句を始めてからはそれなりに多少の勉強はしているが、それはY子の言う「勉強」とは違ふのではない。Y子は着付けの免状を持つていて、押し花できれいな葉も作れる。私には全く出来ないことだ。人にはそれぞれ得手不得手がある。余命の計算も出来る歳になつてこんなことに気を煩つてゐる彼女を少し気の毒に思つたりする。押し花作りより短歌、俳句のほうが「高尚な」趣味だと思ふなど。

句集喝采

曲淵徹雄

◆九里 順子「日々」

発行所鬣の会

著者略歴 昭和三十七年福井県生。平成二十五年第一句集『静物』、平成二十八年第二句集『風景』。著書『詩人・木下夕爾』『詩の外包』等。「鬣 TATEGAMI」同人。

著者の第三句集。三十年間勤めた大学を退職し実家に戻った著者の、仙台から福井に至る日々の中の生活の中で心に留まったものが大事に詠まれている。

八章の各タイトルは、各句の背景をなしているようだ。

第一章「残景」より一句。著者はおおらかに飛んでいる。

第二章「合流地点」より一句。言葉の心象と写生とが合流。

第三章「中景」より一句。乾いた蒼の凍空を背景に、中景は血の色の一筋の物語。どんな物語だろう。

以下の五句は、「往還」「マイ・ホーム」「過日」「千秋万歳」「好日」の章より各一句。

触れもせで山百合の昼開けてゆく
窓側も燈し頃なり秋彼岸
鍼灸院兼ねし寺院の梅擬
秋霖や力士幟の間もなく
風抜ける町家の奥の昼蛙

他に、「緑雨とは樹々に心に伝ふ雨」、「飛石を濡らして町中の喜雨」、「取的の足よく上がる五月場所」など。

◆関根 紀恵「石路の花」

前田印刷

著者略歴 昭和十五年新潟県生。昭和六十一年「曲水」入会。平成十二年「曲水」新人賞。平成十七年大作賞。平成十九年水巴賞。平成二十三年「曲水」終刊後、「新月」入会。俳人協会会員。

平成八年から令和五年まで二十八年間の句を収載。著者の第一句集。句集名は「寺を守るわが胸照らす石路の花」より。

法堂の静寂 涼しき禅問答

鈴虫や淡き灯もらす花頭窓

開眼の卵塔煌々と冬日和

葺き上げて百花香を上ぐ花御堂

綿虫の遊行意のまま風のまま

鎮魂の鐘の余韻や鳥曇

無住寺の天を展げて小鳥来る

第一句〜第四句、住職の妻として著者が守る寺の景を中七で抒情的に詠う。第五句から第七句も同じ著者の心で捉えた句。

春星へ馬鈴のひびく鳴沙山
春炬燵据ゑて孤島の何でも屋
腰蓑を干して鶉の家の秋深む

朝市の振れば鳴るよなさくらんぼ

雪吊の弦に日の韻風の韻

以上五句、落ち着いた写生により風景が浮かんでくる。

他に、「発酔のワインつぶやく暮の秋」は酒好きの筆者に嬉しい句、「銃眼の三角四角小鳥来る」の鋭い着眼の句など。

網野月を選

山紫集

裏山に私雨や雁帰る

加藤でん治

雁帰るダム湖に沈む村の橋

野口和子

山水の墨の余りの帰雁かな

小林京子

港内に舟唄響く帰雁かな

元田亮一

——以上厳選

帰る雁兵士らはまだ帰れずに

畑宮栄子

帰る雁武原はんの舞に似て

原田秀子

帰雁どきV字飛行の列をなす

樋口元美

聲ひとつ残して雁の別れかな

日高道を

一羽二羽離れて一羽帰る雁

檜鼻ことは

嫌はれの国めざすのか帰る雁

福田千春

産土に我も帰るか雁帰る

保坂翔太

雁帰る帰る場所なき尋ね人

綿引まりこ

行く雁や水面の静寂戻りけり

岡田宣子

ぐんぐんと帰雁ゆるゆると落日

山下ユリ子

大風の止む暁の帰雁かな

鈴木藻好

菩提寺の屋根より暮れて雁帰る

松宮保人

書き置きの恋文めいて雁帰る

森 和子

欄干に手を置くひとり雁帰る

曲淵徹雄

北国へ旅立つ雁の群いとし

山岸久美子

新しき墓石を増やし雁帰る

正木萬蝶

行く雁を帰ると言ふこそ寂しけれ

山中いちい

雁帰る伏し目に御座す阿弥陀仏

町野広子

雁帰る古墳は何も変はらずに

湯浅 和

一竿が越ゆる遠山雁帰る

松井由紀子

遠山は闇のかたまり雁帰る

横山君夫

幼子の見上ぐる空を雁帰る

丸屋詠子

鎌の列端の遅れや雁帰る

横山札子

行く雁や「ごきげんよう」と逝きし人

丸山マシミ

名声も帰雁の声も天に消ゆ

吉川拓真

行く雁の羽音大きや鄙の天

宮崎チアキ

抑留の懐古話や雁帰る

青木鶴城

行く雁や夜間飛行のハードトレ

持永喜夫

帰る雁海辺の夜は灯の乏し

秋谷風舎

遺伝子に生まれし凍土雁帰る

本橋稀香

地図は無き能登を残して雁帰る

新 曆文

行く雁の列美しき影を曳き

森川義子

伊豆沼に思ひ出落とし雁帰る

阿部幸代

荒川と草原の上雁帰る

森下美智枝

行く雁や帰心叶はぬ風見鶏

荒井俱子

貸舟や帰雁の湖に櫓の軋む

森美枝子

雁帰る唐丸籠は刑場へ

飯田忠男

雁帰る淀はきらめくばかりなり

飯塚智恵子

虚しさを沼に残して行く雁よ

熊倉千重子

羽根裏に沼の香移し雁帰る

池田珪子

雁帰る見送る水草後にして

河野はるみ

一声の尾を引くかなた春の雁

池田雅夫

帰る雁友を守りて鉤となり

小駒さち子

雁帰る入り日に遅れまいとして

石川理恵

雁帰る優琴響く朗読会

越田栄子

雁帰るA・Iなんぞや我が回路

石田慶子

行く雁や冠雪の富士遠くなり

小山あつ子

帰雁すや母とし児をば悟す時

井上燈女

国境はひとの身勝手去ぬる雁

近藤徹平

先達に従ひ雁の列帰る

井上玲子

本当の平和希^{のぞ}みて雁帰る

榊原聰子

倣ひとや雁惜まれつ北帰行

上戸千津子

大利根の空一画を雁帰る

佐々木史女

北国の囲ひ取る夕雁帰る

梅澤輝翠

空中の隊列見事帰る雁

笹本啓子

雲間より雁の別れのこゑ哀し

梅澤佐江

人間のノイズに飽きて雁帰る

篠崎紀子

月影に一羽はぐれし帰雁かな

大場順子

一心に故郷恋ふや雁帰る

篠原さよ子

雁去りて残り餌のみあるばかり

川島夕峰

母逝きて古里遠し雁帰る

渋谷さいち

北へ北へと群て飛び行く帰雁かな

嶋田洋子

落日を背中に浴びて雁帰る

高島寛治

腰伸ばし農夫見送る去ぬる雁

清水桂子

度々の打上げ延期雁帰る

高橋満耶子

殿を気づかふ声か雁帰る

下川光子

行く雁に違ふる景の散歩道

武田重子

おほらかな群れの営み雁かへる

霜多光代

高層階空行く帰雁見送りて

田中章嘉

行く雁の宙に北斗の標かな

菅原卓郎

雁行や雨雲少しうすれけり

寺内洋子

くと描き雁の別れや夕日空

菅原真理

雁行くや戦火の空を越え行くか

飛永 鼓

雁帰る嫁の里より夜の知らせ

杉浦千祐

ゆく先はうるはしき地か雁帰る

鈴木玲子

山奥の古里めざし雁帰る

南條さわゑ

雁帰る戦争絶えぬ水の星

関谷多美子

ドームの空をたくましき隊帰雁かな

西幅公子

雁帰る信号は未だ赤なのに

瀬戸雄二郎

丸文字のノートを束ぬ帰雁かな

野田静香

行く雁や韃靼海峡一列に

染谷風子

時来たる手負ひの仲間置き帰雁

反町 修

燕栗沼朝やけの中雁帰る

野村美子

山紫集作品評

網野月を

雁帰る帰る場所なき尋ね人 綿引まりこ

哀切句である。この「尋ね人」をどのような境遇の人物として考えるかは読者によって異なるであろうが、作者以外の第三者として設定しているであろうことは容易に想像される。あとは「尋ね人」と作者の関係であるが、この点も句中には明記されていない。上五の「雁帰る」の後に逆接の接続詞を補って読むか、順接の接続詞を想定して解釈するかで句意は大きく逆方向に展開するようである。

行く雁や水面の静寂戻りけり 岡田宣子

俳句では禁じ手の上五の切れ字「：や」と座五の切れ字「：けり」の併用である。然れども筆者は「降る雪や明治は遠くなりにけり」を凌駕していると考える。草田男句は凡句だが、掲句は秀句である。中七の「水面の静寂」が主語なのである。意味的には上五と中七座五が関係性を有しつつ、カメラアングルの幕場の転換を工夫している。

ぐんぐんと帰雁ゆるゆると落日 山下ユリ子

いい日旅立ちの景である。季語「帰雁」には哀愁やもの悲しさ、自然の厳しさなどを包含するが、この句にはそう言った翳がない。「ぐんぐんと」帰る雁を見送りながら作者は、「ゆるゆると」日が落ちるのを認めている。何やら日の運航が「帰雁」を祝してくれているようである。「ぐんぐんと」と「ゆるゆると」の副詞句が大胆な表現である。

大風の止む暁の帰雁かな 鈴木藻好

鳥類は朝が早い。「暁の帰雁」はそのものなのである。ただここに「大風の止む」という必要十分条件が付けられた。実景であると思うが、作者の「帰雁」への愛情を感じるとともに、祈りにも似た情感を感じる。筆者のような深読みが可能なのは、景の描写の現実性があるからで、作者の感情表現を極力抑えているからなのである。

菩提寺の屋根より暮れて雁帰る 松宮保人

俳句という詩の形態を思う存分活用して作句している。韻としても文字としても申し分ない表現である。「屋根より暮れて」は観察が行き届いているし、作者の「雁帰る」の季語の解題も完璧である。もし欠点を言うならば、完璧に過ぎることであろうか。

書き置きの恋文めいて雁帰る 森 和子

上五中七と座五を切り離して配合の句として解釈することが出来るであろう。誰かから貰った「書き置き」が「恋文」のように作者には思えた、ということである。淡くて儂い青春の思い出のようにも捉えることが出来る。その延長線上の解釈として、「雁」に誰か人物を投影しているようにも読める。その場合は、配合というよりも隠喩⇨メタファーとしての「雁」を想定することになるであろう。筆者は「置き」から雁風呂のようなシチュエーションを思い浮かべた。大いに切ないのである。

裏山に私雨や雁帰る 加藤でん治

中七の「私雨（わたくしあめ）」とは限られた小地区に降る俄か雨を言うのであろう。そこで上五の「裏山」は將に文字通りということである。と同時に、この雨の中を旅立ってゆく帰る雁への予餞の心持ちを込めているのである。帰雁への感情移入の句なのである。

雁帰るダム湖に沈む村の橋 野口和子

俳句的な諧謔と詩的な哀愁が一体化した作品である。「ダム湖に沈む」ものは、そこに暮しを営んでいた証左のすべてである。沈めてしまったことで無にしてしまったのであるが、またタイムカプセルに閉じ込めてしまった感もある。そしてその一つが「村の橋」なのである。本来の橋は、水の上を渡るためのもので、水上に架けられるものなのであるが、その

橋が沈められることになった。上五に置いた季語「雁帰る」という自然の営みと人間の所業を対比して、作者は無言である。良いとも悪いとも言っていない。詩として現実を冷酷に見つめながら、その現実を俳句という諧謔の枠組みで、オブラートに包んでいるようだ。

山水の墨の余りの帰雁かな 小林京子

句の構成に版画家M.C.エッシャーのような幾何学的手法を感じさせるところがある。錯視的な小宇宙を感じさせている。作者は「帰雁」を見上げ、見送りながらあたかも山水画の墨の勢い余った点の様に雁の姿を捉えているのである。筆に含まれ過ぎた墨の滴りのように「雁の棹」を眺めた、ということであろう。

港内に舟唄響く帰雁かな 元田亮一

たぶん日本海側のとある港であろう。誰か分かれぬが舟唄を歌っているのである。その唄に送り出されるようにして雁が帰って行くのである。座五が切れ字「…かな」止めであるので、一句仕立てとして披講してよいだろう。その場合は、「帰雁」の景と「舟唄」が一体として作者の心に飛び込んで来る、と解せるであろう。中七の「響く」を終止形として捉えて披講するならば、「舟唄」と「帰雁」の間には絶妙な間合いが出来て、「帰雁」によりウエートがある句としても感じられることになるのではないだろうか。どちらにしても景の解釈に大差ないのであり、要は作者の心持ちにどれだけ寄り添うかということである。

十一月・十二月号は合併号となります

十一月・十二月号の合併号は諸物価高騰への対応及び水明の毎月発行スケジュールの適正化等の目的で実施いたします。

合併号の紙面（従来号との違い）

・投句回数

水明集の方は従来通り年十一回です。

季音欄の方は従来年十二回が年十一回になります。

・「夏季競詠」を「水明競詠」に名称変更し、合併号に掲載します。（従来七月募集が八月募集に変更になります）

・今後は周年記念事業の特別作品等を掲載する他、

合併号としての内容の充実を図ります。

合併号の誌代

・合併号の誌代は二〇〇〇円となります。

水明主宰 山本鬼之介

水明 常任運営幹事会

特集 高濱虚子生誕一五〇年 鼎談 虚子選と女性俳句 井上泰至・西村和子・堀切克洋	巻頭作品10句 加藤耕子・塩野谷 仁・中村正幸 辻 桃子・ふけとしこ・森田純一郎 白濱一羊・鴛田智哉	<h1>俳壇</h1> 7月号 6月14日発売 定価900円（税込） 巻頭エッセイ 岩岡中正 八木健選 滑稽俳壇	四季巡詠33句【第Ⅳ期】……朝妻 力・村上喜代子
			俳句の宙二〇二三——精選アンソロジー作家作品集
新連載 明日への俳句……………岩田 奎	連載 俳人の住む町……南うみを・唐澤南海子 私の本棚・私の一冊……………田中春生 旧派の俳句……………秋尾 敏 名句のしくみと条件……………坂口昌弘	俳句と随想12か月 石井いさお・宮谷昌代	

本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

「水明」年間予定表

	特集号	発行日 (予定)	締切	
			水明集	季音
1月号	・運営組織、年間行事、教室案内等	12月20日	10月20日	11月20日
2月号	・水明年間作品回顧	2月1日	11月25日	12月25日
3月号		3月1日	12月25日	1月25日
4月号		4月1日	1月25日	2月25日
5月号	・六賞発表	5月1日	2月25日	3月25日
6月号		6月1日	3月25日	4月25日
7月号	・水明賞受賞者ノート	7月1日	4月25日	5月25日
8月号	・新珠賞受賞者ノート	8月1日	5月25日	6月25日
9月号	・全国大会・兼題句入選句 ・季音賞受賞者ノート	9月1日	6月25日	7月25日
10月号	・鼓笛賞・山紫賞受賞者ノート ・新季音同人紹介〔11月号より〕 ・新同人紹介	10月1日	7月25日	8月25日
11月号 12月号 合併号	・作家特集（かな女賞） ・水明競詠〔10月号より〕	11月15日	8月25日 (水明競詠 も同日)	9月25日

水明例会

第一例会（浦和）

惜春や手品師に種吾あに愁ひ
 桜満開人呼ぶ時は手招きで
 幹に根元に古木の桜日本橋
 英霊をしのぶ内堀御所桜
 気品ある老妓の立ち居花あかり
 緋桜や墨の香つよき朱印帳
 踊るなら桜吹雪の真ん中で

道ゆづる人の品格春の宵
 夕映えに古木の桜気品満つ
 鳴り止まぬ津波警報若ざくら
 里桜海へ傾るる千枚田
 序の舞の気品のまなこ初桜
 枝垂桜に流石品格角館
 一品を持ち寄る里の花宴

茂木和子
 小林京子
 報

喜恵
 〃
 はるみ
 徹平
 マスミ
 卓郎
 和子
 以上特選
 チアキ
 はるみ
 延昭
 マスミ
 順子
 京子
 由紀子

第二例会（東京）

川底を桜流るる隅田川
 春霖や手品師落す濃化粧
 新札待つ造幣局の桜満つ
 義経をしのびみちのく夕桜
 見覚えある後姿や夕桜
 春旅や神社めぐりの九品佛

春の夢ずつと捜してゐる切符
 足の裏に熱こもりをり春の夢
 人影の消えた大地に霞草
 また彼奴か現に帰る春の夢
 かすみ草骨となりても大男
 春の夢生家はいつも母ひとり
 注文は雲呑一杯春の雲
 麗らかや曾孫の背負ふ一升餅
 母の手の下ろすヴェールや霞草

山中みどり
 青木鶴城
 報

節代
 卓郎
 和葉
 徹平
 喜恵
 和子
 妙子
 〃
 士史
 いちい
 峰雄
 竺仙
 みどり
 鶴城

第三例会（東京）

猫のクロ惚び窓辺へ霞草
 春の夢に掘り起こさるる苦き過去
 枯れ花も包み込むよな霞草
 風吹いてむれなでしこの届く午後
 花吹雪風にも色のあるごとし
 春夢の夜半過ぎかな一つ星
 江戸前のお天婦羅揚がる花見船
 喝采を浴ぶる壇上春の夢

雅び男のいまは老農花菜風
 義経ここに亡び菜の花明りかな
 弁当のあれこれ零す花筵
 花菜道たどり江戸川くれなづむ
 名山の裾広げたる花菜かな
 菜の花を岸に千曲の幾曲り

五明
 曲淵
 徹雄
 昇報

以上特選
 敏江
 峰雄
 りこ
 妙子
 竺仙
 士史
 みどり
 鶴城
 萬蝶
 順子
 理恵
 千祐
 徹雄
 昇



望郷の酒に花菜の芥子和へ

——以上特選 昇

蓬餅女系に初の男児生る

夕まぐれ迷子の果ての初桜

菜の花や六地蔵には赤きべべ

菜の花や渡しへ誘ふ土手の道

白銀の遠き山並花菜畑

ざいと鳴る音は結界花菜風

花菜漬黄の苔ある握りめし

菜の花や空の蒼さに海の青

遠近に落つる水音春の川

四月馬鹿入日を喰らふ佐渡島

萬 蝶 千 祐 理 恵 星 歩 順 子 康 世 喜 久 雅 夫 徼 雄 昇

第四例会 (浦和)

石井喜恵 反町修報

燕来てむかしが還る城下町

中仙道宿場伝ひに初つばめ

ためらはず翔べよつばくら能登の空

時の鐘響く城下や燕来る

少年の狙ひは飛燕シャッター押す

早起きの燕は駅舎生まれかな

植木市夢をはくくむ桃苗木

「いせ辰」の龍の手拭植木市

粋な声素通りさせぬ植木市

剥き出しの梁に電線つばくらめ

——以上特選 延昭

第五例会 (浦和)

梅澤佐江 河野はるみ

合鍵や悪女めきたる春の暮

寺井波も隅ずみまでも一輪草

むらさきにけぶる秩父嶺春の暮

茶房の窓辺春の暮色に染まりゆく

城跡の風にさゆるぐ一花草

一つ手前の駅より歩く春の暮

春の暮ボール捜して帰れぬ子

石畳三分の隙の一輪草

一輪車に農具積み終ふ春の暮

——以上特選 義子

若松例会 (京橋)

正木萬蝶 石田慶子

春の暮沖よりとく碇泊灯

独り居のさ庭明るし一輪草

山路来て足元に咲く一輪草

桜餅ひとつ足りずに黄身しぐれ

此の度は葉のいと小さき桜餅

思ひ出はやや塩つばくら桜餅

春の星池に映るは乙女座か

昭和めく池のさざ波遠桜

遷東のしづかなる雨桜餅

尼寺の作務衣の淡し桜餅

池端の枝垂柳や新内節

人間もやはき葉を食み桜餅

花盛る灯下に書生心字池

その縁起土師寺にあり桜餅

古戦場池塘鎮むる牡丹雪

水温む池塘の息吹き泡あまた

来し方も塩味ほのと桜餅

辛口の夫に供ふる桜餅

芽吹く色まとふ古木や神の池

ジャズ流れ珈琲添へて桜餅

桜餅昔仲良き姉妹

おみくじの凶を預けて桜餅

宣子 玲子 美佐尾 萬蝶 京子 鶴城 星歩 ひろこ 月を 萬蝶 京子 鶴城 星歩 ひろこ 月を

関西例会（大阪）

森本早苗報

逢いたしと思ふひとつや蜃気楼

色町の名残りの格子燕来る

閉店の最後のまかなひ桜鯛

石仏の貌まろやかに遅桜

須磨琴の調べ嫋嫋春惜しむ

春光に神威しるけき蛇行劍

促され杖つく稽古山笑ふ

八十路とて時に紅差す桜鯛

夕東風や孤島の祠波あらぶ

美容師に肩叩かるや目借り時

桜鯛骨の硬さに畏怖覚ゆ

惜春や海の恋しい鏝鏝

桜鯛優勝力士をかがやかす

今朝の雨弾みとなりて牡丹の芽

断捨離に心身いたむ残花かな

直真に生ける満作本堂に

手に取りて残る桜を惜しみけり

良縁に恵まれし子に桜鯛

海峡越すJALを一呑み春霞

洋子

道子

満耶子

千枝子

玲子

和子

千津子

早苗

以上特選

玲子

千津子

洋子

道子

和子

千枝子

満耶子

千世子

さわゑ

嶋田洋子

早苗

昔話あれこれ 38

忠平の豪胆

ある時、忠平が天皇の命を受けて執務のため陣の座に行こうとした時、何かが居る気配がして太刀の鞘尻を捉えた。不思議に思つて探つてみると、手は毛むくじやうで、爪は長く刀の刃のようであった。「さては鬼だな」と非常に怖かったが、臆した様子は見せるものかと、我慢して、「帝の命で、陣の座での評議に行く者を捕えるとは何事か。手を放さねばただではおかぬぞ」と言つて刀を抜き、その者の手を掴んだところ、うろたえて手を放して丑寅（東北）の隅に逃げて行つてしまつた。

*（こ）で、世継は「この殿のお話をするの、恐れ多く感慨深いことですね」と急に声の調子が変わり、度々鼻をかむのであつた。その訳は忠平が他の大臣よりも優れた人物であつたのと、聞き手の夏山重木の旧主であつたことへの斟酌でもあろう。（頭注より）

太政大臣実頼

実頼公は忠平公の長男である。「小野宮の大臣」と申した。母は宇多天皇の娘・順子である。

大臣の位で二十七年執政し、摂政関白として二十年任に當つた。

*（実際は、天歷三年（949）から康保三年（966）まで首席大臣。

康保四年（967）関白、安和二年（969）摂政、天祿元年（970）死去。

摂政は四年間。（頭注）

和歌の道にも優れていて、後選集にも多く取られている。

知識が豊かで、心が端正であつたので、人々の模範と言われた。

小野宮の南向きの正殿には、髻をきちんと結わずには出ることはなかつた。その訳はその稲荷神社のご神木の形がはつきり見えるので、

「明神が見ておられるかも知れないのに、どうして無礼な格好で出ることが出来るよう」と用心していた。

うっかり忘れることがあると、袖で頭を覆い隠してうろたえて騒ぐのであつた。

（つづく 丸山マスキ）

各地句会



若枝句会 (浦和)

こゑ満つる野面の彼方山笑ふ
 日溜りに透くる黒目や蝌蚪の紐
 山吹の舞ふせせらぎに黄の映ゆる
 歩むたび五感溶けゆき山わらふ
 単線の二両連結山笑ふ

敏江 美佐子 泰生 貞代

めだか句会 (浦和)

幕引きは二倍速かな春惜しむ
 春惜しむ菩薩の笑みのシンメトリー
 磯巾着ゆれ狂詩曲鳴りやまず
 いしぼたん満艦飾の目立ちたがり
 惜春の行つたり来たり皇居前
 空腹の磯巾着に高楊枝
 太平洋の反対側の磯巾着
 寿府に春の訪づれ深むらさき
 おほどかに窓を行く風春惜しむ

灯留 六弦 比早子 知子 妙子 敦子 月を 鶴城

姉住まふ長寿の島より新じやが来
 掘りたてや友の骨折り春惜しむ

はるみ 三茅

別れ霜百年物の盆の松
 舞ふほどにつのる恋しさ一人静
 道の辺の草の生き様別れ霜
 別れ霜茶葉のゆるみもゆつくりと
 抜道のこゝが出口か別れ霜

広子 和子 和葉 かつ子 喜恵 マスミ

新樹の会 (浦和)
 長男は並べて甚六小米花
 雪柳解るれば花散りにけり
 雪柳花満開の通学路
 居酒屋の身の上話春の雷
 名脇役と言はれて久し雪柳
 立話のつきぬ路地裏雪柳
 上京を見送る父や雪柳

風子 清通 道吉 徹雄 鶴城

紙で巻く折れたクレヨン眉掃草

節代

若楠句会 (浦和)
 うつぶせの砂の裸婦像磯遊び
 先達に添ひて木曾路や春霞
 鐘の音のただよふ街や夕霞
 潮の香の弥増す昼餉磯祭
 飲み忘れ防ぐ柘目や目借時
 柘席に和装華やぐ春芝居
 柘酒に花びら浮かせ友を待つ

真由美 葉子 風舎 京子 直子 鶴城 宏治

老いゆくも秘める恥ぢらひ残花かな
 花見酒蘊蓄競ふ半可通
 花見酒蘊蓄競ふ半可通
 去りゆきし筏見送る残花かな
 残花にはJAZZが似合ふと君の言ふ
 木鉄の音軽やかに残花剪る
 祈りの目開ければ神のかぎろへり
 残る花今朝は一人のランドセル
 花吹雪く宮居の通りを風とゆく
 菜の花の香りたつぷり通ひ道
 運命の人陽炎の向こうから
 級友皆後期高齢残り花
 野仏やいつしかひとり残る花

ひとみ 香音子 真子 秀子 紀子 稀香 芳春 道郎 貴 月を 鶴城 喜夫

若鮎句会 (浦和)
 一人静ゆると墨磨る奥座敷
 向島江戸の名残りの別れ霜
 大地よりマグマふつつ別れ霜

昇 史代

花の雲手押車に犬のせて
 再会の約束未だ夏近し
 退院の友を労ふ花の雨

玲子 千津子 早苗

神戸大池句会 (神戸)

昇

花の雲手押車に犬のせて
 再会の約束未だ夏近し
 退院の友を労ふ花の雨

玲子 千津子 早苗

円卓の会 (浦和)

碧海や野生馬の食む草若葉
春雷や水面さざめく船溜まり
サラブレットのペガサスのごと草若葉
春夕焼静かに暮るる西の京
白雲の流るる方へ水草生ふ
花吹雪バシヤバシヤと鯉の恋
その頃は恋と気づかず春夕焼
舞ひ上がる蒲公英の絮地の香り
俳句の手ほどき (岩槻)
義仲寺の庭井戸に蓋花の冷え
遅桜分水嶺の水浄し
遅桜峠の茶屋のはうたう鍋
春燈や義母の形見の江戸小紋
村の義理街の薄情雁帰る
かたくなに知らん振りして遅桜
奥飛驒に華やき添ふる遅桜
臘月江戸の義賊の心はへ
伊豆の春義妹のはしやぐ車旅
背低くともよき仁和寺の遅桜
法螺の音の響動む三山遅桜
幼き日の恩義を胸に里桜
遅桜湖に威を張る男体山

修香 静太 翔太 道を 京子 輝翠 月を 鶴城
延昭 佐江 徹平 義子 翔太 忠男 桂子 幸代 久美子 美子 卓郎 千アキ かつ子

小梅の会 (浦和)

飛花落花一人バスケットを小学生
春服や皆それぞれの月曜日
桜散る皆それぞれの道行きて
坂道も厭はぬ母のチュエリッパ掘り
恋猫も人も争ふ浮世かな
小梅の会 (先月分) (浦和)
故郷は大字にあり山笑ふ
三月や小学校の習字展
暖といふ字数を数へ春に入る
字余りの俳句つくりし春の宵
花を待つ人も小鳥も多国籍
たかなな俳句会 (川口)
緑立つ樹形さまざま皇居前
言ひたげに肩先つづく若緑
春の雨バスの加速のやはらかに
若緑威厳を保つ旧家の門
手加減の序盤の一手春惜しむ
一輛車桜並木を抜け加速
水明熊谷句会 (熊谷)

隆文 惠子 隆然 道を
隆然 惠子 隆然 道を
隆然 惠子 隆然 道を
謙一 のり子 小麦 義子 鶴城 静香
卓郎 風子

青銅の風鐸躲す初燕
風流を地で行くをこ荷風の忌
水温む厨が主婦の指定席
朗報はある日突然燕来る
四つ這ひに渡る丸太や水温む
水温みため息もらす百葉箱
コクーンシテイカルチャー俳句教室 (さいたま新都心)
姫川は玉産む流れ山葵沢
春雨や稽古帰りの左棲
叩かれて眠るパン生地春の雨
大朝寝遅刻の夢に飛び起きる
戸袋の軋む音聞く朝寝かな
軒かく夜遊び猫の朝寝かな
己が播る山葵にむせぶ蕎麦処
皐月の会 (浦和)
暦はや百三枚目養花天
右膝の曲がらぬ角度花曇
花曇りコントラルトの愛の唄
瓦礫より印半纏能登の春
珍客をおもてなしする初桜
遊印の押されし墨絵月朧
遠足の輪唱の列見え隠れ
遠足の菓子買ふお金握りしめ
遠足の列が散らけて恐竜館

秀子 燈女 栄子 徹平 茂子
延昭 美枝子 俱子 健司 由美子 昇
山菜 更穂 光代 珪子 紀子 静香 曆文 美佐尾 さいち

野ばらの会 (浦和)

観音は山路にありて花木五倍子
快音は逆転なるか春の芝
亡き叔母のテーブ音声桜咲く
幽かなる羽音にゆれるすみれ草
櫻の芽の天ぶらの音夫待てり

水明濁つくし句会 (大阪)

行く春や鎖骨に這へるくさりかな
花疲れして百均のパンを買ふ
逢ひたしと思ふひとつや蜃気楼

芙蓉句会 (浦和)

人影に右往左往の目高の子
海風の香りをまとひ桜餅
『しもった』が座右の銘や春の果

蝌蚪の会 (浦和)

トラクターの黒き土塊夏近し
谷間より風見あぐれば夏近し
カーテンを海面に替へ夏隣
鬢結へぬ力士に賜杯夏近し
夏近しくローゼットを眺めをり
道祖神笑ふ信濃のげんげん野
マリオネットのごと飛び交ふや蝶二頭

茂子 夏江 栄子 秀子 みき子
智恵子 人美 洋子
税子 美子
しるく 風舎 夏野 秀子 さち子 礼子 ひさの

追ひかけてもつれて消ゆる蝶の恋
信長の蝶は帰らず蝶の夢
竹の秋信楽狸の太つ腹
潮入の池の水門夏近し

若狭水明会 (若狭)

里山へ羽衣降り立つ花辛夷
春暁の産声を聞く安堵かな
春暁の届く遠鳴り高速度
春暁の富士の腕に抱かれり
春暁や梵鐘響く谷の村
卒業をギターで送る教師かな
どや顔の漁師やさしきしじみ汁
花ごぶし日向に並ぶシルバーカー
御仏の御手ますかけ花辛夷
山辛夷棚田に響く耕耘機

鶴川山百合句会 (町田)

叱られて夜を咲き続く面影草
灯台のある町に古り山吹は
山吹の一重が好きと母も吾も
尾を振りておどけ上手な蛙の子
春めくや旅の土産の一筆箋
よきよきと新芽とりどり春たのし
空青く春は足踏み夫逝きて
山吹やふんははり卵焼きサンド

元美 月を 鶴城 宣子 初花 郁子 祥子 笑風 ことは 白鷺 寛久 八重子 和風 保人
史代 廣子 萬蝶 理恵 美千子 うさぎ 玲子

櫟の会 (浦和)

「ててて手を上げ」交通指導花吹雪
山寺の高鳴る木魚花吹雪
満開の誇りを秘めて散る桜
老木の咲き尽しをり花吹雪
水温む子は秘め事をばろり言ひ
名画観て花吹雪浴びああ至福
水温み水琴窟のまるき音

さざきサークル (浦和)

医を信じ妻を頼りの大朝寝
春の昼跳び出しさうな童子仏
ままごとのママは鼻歌春の昼
中華井甘辛あんかけ春の昼
揺り椅子を猫が占領春の昼
朝寝からつづきのやうに母の逝く
春昼や異人手を振る人力車

あゆみの会 (浦和)

背の丸き八十路の姉妹桃の花
桃の花ビルの狭間の遊女塚
公園に桃の花咲き楽しめり
桜まつり園に居並ぶキッチンカー
門脇の源平桃に惑はさる
桃の花声高に賞つ異邦人

文子 治子 あつ子 裕誌 朋子 富子 千重子
俱昇 和枝 啓子 由美子 和子
重子 俱子 山遊 啓子 藻好

和歌山水明句会 (和歌山)

花吹雪廃止間近の路線バス
鱒東風坂道おほき漁師町
雲上の風をしのぎて城の花
テーブルと椅子を石にす花の昼
不動明王の目玉ざらざら飛花落花
花吹雪両手広げて幸つかむ
落椿岩をしとねに艶ませり
白無垢をぬぐや蟒蛇さくら鯛

青葉の会 (浦和)

記憶鮮明吉野千本桜かな
子の留学偲びて見詰むる春の草
大広間菩薩の壺に春の草
生花展脇役となり春の草
八十路となれば記録大事や臚月
強き香を団子に練るや春の草
春草の匂ひが風と遊びをり
北限の馬の蹄に春の草

蘭の会 (浦和)

ポイ捨ての缶の転がり春の風
万物の命の形蝌蚪の紐
春風や小さき祠の幣ましろ
転勤の内辞ドキドキ春の風

和子 道子 千枝子 千世子 満耶子 さわゑ 洋子 廻代
美智枝 美紗子 美子 啓子 公子 洋子 眞理 輝翠

退院のバッグ持つ手に春の風
雨けぶり蝌蚪の集まる水田かな
宮跡は礎石ばかりや春の風
春めぐり再び知りぬ時の価値
初めて個展の知らせ春の風
春風や逆方向に乗る電車
春風に口笛乗せて母卒寿
気骨あり矜持もあり蛙の子
春風や大人の世界はきつく吹く
春風に首長くしてポインター

山茶花 (浦和)

ぺんぺん草指でまはして下校の児
旧姓で届きし便り花曇
雛の会 (浦和)
芝桜大仏の頬そめてをり
かな女句碑永久に輝け芝桜
路地裏の暗さ一変芝桜
芝桜ぐるりと廻す万華鏡
春潮や一点船の動かざる
スカレットと名にし負ひたる芝桜

りんどう俳句会 (浦和)
桜の夜婚礼談義沸騰す
船窓の丸き夕空雁帰る

まりこ さよこ 風舎 寿夫 律子 和子 伸子 月城 京子
美江子 マスミ 輝翠 公子 チアキ 燈女 佐江 寛治 君夫

旅の途の孫寄るひと夜春の風
春風に吹かるる薄き旅衣
春風や庚申塔に「うらわ二里」
朝桜仰ぎて眩む齢人
桜花瑞穂の大地いと眩し
満願の色に桜と空の蒼
春風と銀座パーラー銀の匙
咲ききらぬうち静かに散る桜
春風の文鎮重き写経かな

芽吹句会 (浦和)

糸柳丹塗りの橋をくぐる鯉
せせらぎのリズムに和する川柳
道の辺のゆかしき花や春惜しむ
異国への単身赴任春惜しむ
清流の水照りにふるる柳かな
北陸の湯めぐり三日春惜しむ
就職の皇女へエール遠柳
透かし見る城は江戸城糸柳

野菊の会 (与野)
活けなんと花の一と枝持重る
失せ者の局棚より春の昼
花曇廃棄するもの書きつらぬ
鳥雲り心折れてる彼の声
垂れこむる雲閃光なる燕
水温む猫にいたたく大欠伸

弘夫 治子 風子 徹雄 翔太 順子 まりこ 夕峰 卓郎
千重子 久美子 千アキ 玲子 富子 ひろこ 道
美代子 和子 清子 倭子 恵子 光子

櫻 蔭 句 会 (浦和)

朗読と笙の音色や春の月
 春三日月のゴンドラ浮かぶ宵の空
 春の月少し朱を帯びうるうると
 春の月言葉を持たぬ里の家
 あかね空うかびし細き春の月
 七つ立ち東に細く春の月
 春月に金星並び空無窮
 春満月蝶子式時計ゆるく打つ
 一目千本吉野の山に春の月
 春の月道やはらかに草ねむる
 「蚊相撲」の舞台に笑ひ春月夜

水明鬼石句会 (鬼石)

美 子
 多美子
 真 理
 茂 子
 千 恵
 行 雄
 久美子
 由紀子
 美智枝
 公 子
 幸 代
 和 子
 聡 子
 ナヲ子
 建治郎
 道 を
 久美子
 暦 文
 勲

清明や口含みたる沢の水
 清明や花巡礼の杏子墓碑
 清明や光とびかふ雨あがり
 柿 の 木 塾 (浦和)
 一叢の山吹明り武将塚
 黒猫の見え隠れする濃山吹
 白山吹こんな鄙まで異邦人
 山吹の黄に気を貰ふ急がねば
 山吹や風に吹かるる鈍屑
 この山に黄金銅濃山吹
 砂浴ぶる鳥に山吹明りかな
 ミモザの会 (横浜)
 昭和の日名司会者の決め台詞
 「君の名は？」いつも問ひたき百千鳥
 新しき名札輝く入学児
 父のブライドいまだ健在昭和の日
 昭和の地震・雷・火事・親父
 花筏和船を漕ぐは若き女
 父母の声忘れて久し昭和の日

寛 治
 マスミ
 雅 夫
 昇
 恵 子
 節 代
 和 葉
 章 嘉
 かつ子
 和 子
 玲 子
 美千子
 詠 子
 史 代
 萬 蝶
 栄 子
 千 春

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
 希望者は、下記により作品を送って下さい。 主宰 山本鬼之介

- [指導者] 網野月を
 [作 品] 5句 [受講料] 1,000円
 [方 法] ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記 ③84円切手を同封 ④返信用封筒は 不要 ⑤締切なしで随時受付
 [送付先] 網野月を 電話 080-7580-0208

〒338-0012 さいたま市中央区大戸 1-31-2

令和6年 水明全国大会・懇親会のご案内

令和6年水明全国大会をご案内申し上げます。誌友・同人・季音同人の皆様には、奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

■令和6年水明全国大会

日時 令和6年6月29日（土曜日）
受付開始 11時30分 開会12時 閉会17時00分
会場 さいたま共済会館 6階 601号室
〒336-0064 さいたま市浦和区岸町7-5-14
TEL 048-822-3330
行事 水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞・鼓笛賞・山紫賞の表彰、受賞者のご挨拶、季音同人、新同人の紹介、兼題入選句の発表と表彰、講評等。

■水明懇親会（第94周年）

日時 令和6年6月29日（土曜日）
受付開始 17時00分 開会17時30分 閉会20時30分
会場 さいたま共済会館 6階 601号室
行事 アトラクションなど

■参加費 令和6年全国大会・懇親会 15,000円
令和6年全国大会のみ 3,000円
懇親会のみ 12,000円

■申込締切 令和6年6月15日（土曜日）必着
添付の指定「申込書」を使用し、参加費を添えて発行所総務部へお申し込み下さい。
※なお、参加費を振込にて別途送金される方は、指定「申込書」の「申込金支払方法」の振込をチェックしてください。
※宿泊等については実行委員会へお問い合わせください。
◎全国大会は貴重な機会です。永年の会員の方々はもちろん、新入会員の方々もお誘い合せの上、多数ご参加ください。

令和6年水明全国大会実行委員会 実行委員長

水明夏行のご案内

下記の日程にて水明恒例の夏行を開催いたします。添付の指定「参加申込書」を使用し、参加費を添えて7月22日(月)必着で発行所総務部までお申し込み下さい。大勢の皆さんのご参加をお待ちしております。なお、皆勤賞を用意しております。

- 【夏行】 第1日目：令和6年7月29日(月)
午後1時～5時（午後12時30分受付）
第2日目：令和6年7月30日(火)
午後1時～5時（午後12時30分受付）
第3日目：令和6年7月31日(水)
午前11時30分～午後5時（午前11時受付）
※第3日目の開始時刻は1時間30分早くなっております。

- 【会場】 JR浦和駅東口「浦和パルコ」10階
浦和コミュニティーセンター
第1日目／第13会議室 第2日目／第14集会室
第3日目／第13集会室

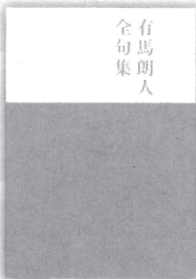
- 【参加費】 夏行：各日1,000円 事業部

有馬朗人全句集

有馬朗人

光堂より一筋の雪解水


第一句集「母国」から
最終句集「黙示」までの全10句集に、
「母国」拾遺、「黙示」以後の
「天為」・総合誌等掲載句を加えた
全5,369句を完全収録！



有馬朗人
全句集

定価16,500円(10%税込)
A5判/上製
ISBN978-4-04-884589-2

口絵/解題/年譜/初句索引/季語索引付き
菜=堀切 実・高橋睦郎・星野高士・高野ムツオ・
小林恭二・神野紗希

 発行：角川文化振興財団 発売：株式会社 KADOKAWA
お申し込みはお近くの書店かKADOKAWA購入窓口 0570-002-008 (ナビダイヤル)へ

風 声

○現代俳句四月号——「現代俳句年鑑2024」を読む」欄
 遠山郁好氏の感銘十句抄に

花冷えの外階段のハイヒール

梅澤輝翠

○現代俳句四月号——「現代俳句の風」欄

一列の電信柱おぼろ月

池田雅夫

初蝶にジャングルジムの迷路めく

五明 昇

切腹は武士の心得初桜

染谷風子

ボンジュール声掛けてみる初燕

原田秀子

老老を朗朗と生く黄水仙

茂木和子

大景を詠めず四五本折る蕨

大橋廸代

うぐひすの真只中に伎芸天

由良ゆら女

○くぢら（中尾公彦主宰）四月号——「受贈俳誌美術館」欄

ダンディに客員教授春の芝

鬼之介

○好日（高橋健文主宰）四月号——「受贈誌御礼」欄

檻越しに月輪熊の月を視る

鬼之介

○雪嶺（石本雪鬼主宰）四・五・六月号——「受贈誌」欄

真つ直ぐに引けぬ白線秋惜しむ

鬼之介

離れ家の琴を聴きつつ松手入れ

ク

○泰山木（松田碧霞主宰）四月号——「受贈俳誌紹介」欄

花丸を付けてやりたき冬の月

○菜の花（伊藤政美主宰）四月号——「諸家近詠」欄

練堀のほどよき高さ寒椿

鬼之介

○白鳥（高松文月主宰）第七十一号——「受贈俳誌より」欄

小夜しぐれ竹人形をつくる家

鬼之介

○笈（山本一步主宰）四月号——「受贈誌の一句」欄

高層のビルは墓標ぞ冬夕焼

反町 修

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

—令和六年四月三十日現在—

原田秀子	1	口	飛永 鼓	8	口
松本光子	10	口	匿 名	30	口
井上燈女	10	口	光が丘俳句教室	20	口
新 曆文	6	口	原田秀子	10	口
永野史代	2	口			
			—合計	97	口—

誤植訂正

五月号に誤植がありました。慎んでお詫び致します。

○六〇頁下段

正 せんさつ

誤 せんさつ

後記

六月二十九日は全国大会です。全国大会の兼題句は一五一六句集まりました。編集部では、只今、水明の編集と並行して大会句の編集を行っております。

主宰に選句をして頂いて、全国大会では皆様に入選句の発表、そして主宰の講評があると思います。全国大会は、六賞受賞の方々と季音同人、新同人、新入会の方々をお披露目の会でもあります。

全国大会、懇親会の申込用紙は五月号、六月号にお付けしましたので、お申し込み下さい。

日本でも三三〇万人以上が感染したという新型コロナウイルスはやつと下火になり、昨年、五類感染症になりました。

しかし、マスクを長年使用したので、滑舌が悪くなったという人がいます。歌舞伎の演目の「外郎売」はアナウンサーや声優のための滑舌教材と長年言われてきまし

た。近頃は、かな学習歌の代表的な次の歌をアナウンサーも滑舌の訓練に用いているとか。皆様もたまに如何ですか。(節代)

「五十音」

北原白秋

あめんぼ あかいな アイウエオ
 浮き藻に 小えびも およいでる
 かきのき くりのき カキケコ
 きつつき こつこつ 枯れけやき
 ささげに すをかけ サシスセソ
 その魚浅瀬で 刺しました
 立ちましょ らっぱで タチツテト
 トテトテ タツタと 飛びたつた
 なめくじ のろのろ ナニヌネノ
 納戸に ぬめって なにねばる
 はとぼつば ほろほろ ハヒフヘホ
 ひなたの お部屋にや 笛を吹く
 まいまい ねじまき マミムメモ
 梅の実 おちても 見もしまい
 焼きぐり ゆでぐり ヤイユエヨ
 山田に 灯のつく 宵のいえ
 雷鳥は 寒かる ラリルレロ
 れんげが 咲いたら るりの鳥
 わいわい わつしよい ワキウエヲ
 植木屋 井戸換え お祭りだ

今月のはてな?

蟒(うばみ)

蛇行剣(だこうけん)

社日(しゃにち・しゃじつ)

雲版(うんぱん・うんぱん)

的鯛(まとうだい)

追責(ついひ)

雲吞(ワンタン)

寿府(ジュネーブ)

67 64 37 35 26 21 15 12 頁

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご利用の方は 時間内にお願ひします。)

水明

令和六年六月号

通巻一二二五号

令和六年六月一日発行

発行所

水明俳句会

〒330-0064

さいたま市浦和区岸町四一〇二二

電話

048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代

半年分 六、〇〇〇円

同人費

(誌代を含む) 一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費

(誌代を含む) 一年分 三〇、〇〇〇円

振替

〇〇一七〇一〇一九三九三

発行人

山本 鬼之介

印刷所

中央 美版

令和6年水明全国大会・懇親会 参加申込書

〈申込締切 6月15日(土)〉

- | | |
|---------------|------------|
| 1. 全国大会・懇親会参加 | 会費 15,000円 |
| 2. 全国大会のみ参加 | 会費 3,000円 |
| 3. 懇親会のみ参加 | 会費 12,000円 |

※上記の希望項目の数字を○で囲んでください。

~~~~~

上記参加費を添えて申し込みます。  
※なお、参加費を振込で別途送金される方は、「申込金支払方法」の振込を○で囲んで下さい。

2024 年 月 日

|         |    |     |     |
|---------|----|-----|-----|
| 住 所 〒   |    |     |     |
| 氏 名     |    | 電 話 | — — |
| 申込金支払方法 | 現金 | 振込  |     |

(申込書送付先：〒330-0064 さいたま市浦和区岸町4-10-21)  
水明俳句会

[緊急連絡先電話番号]

|         |     |
|---------|-----|
| 電 話 番 号 | — — |
| 氏 名     |     |

(緊急時に備えて緊急連絡先電話番号をお届けください。緊急時に使用し他の用途には使用致いたしません。)





# 令和6年水明夏行

きりとりせん

## 参加申込書 〈申込締切 7月22日発行所必着〉

|        |                         |            |       |
|--------|-------------------------|------------|-------|
| 夏行第1日目 | 7月29日(月)<br>13:00～17:00 | 会費 ¥1,000円 | 出席・欠席 |
| 夏行第2日目 | 7月30日(火)<br>13:00～17:00 | 会費 ¥1,000円 | 出席・欠席 |
| 夏行第3日目 | 7月31日(水)<br>11:30～17:00 | 会費 ¥1,000円 | 出席・欠席 |

※出席もしくは欠席を○で囲んでください。

|      |   |   |
|------|---|---|
| 合計金額 | ¥ | — |
|------|---|---|

※会費合計金額を記入してください。

※上記参加費を添えて申し込みます。

2024年7月 日

|    |   |    |     |
|----|---|----|-----|
| 住所 | 〒 |    |     |
| 氏名 |   | 電話 | ( ) |

### 申込書送付先

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町4-10-21 水明俳句会

[緊急連絡先電話番号]

|       |     |
|-------|-----|
| 電話番号  | ( ) |
| 電話所有者 |     |

※緊急時に備えて緊急連絡先電話番号をお届けください。

緊急時のみに使用し他の用途には使用いたしません。





















## 季音抄

山本鬼之介

山に生き山を祀りて朴の花  
一山を覆ひて枝垂櫻かな  
大空の余白目ざして鳥帰る  
三拝の願ひはひとつ落花浴ぶ  
盆梅や嗟迷師を知る友もなく  
就職の皇女へエール遠柳  
義経ここに亡び菜の花明りかな  
よろめくも老いの一興飛花の道  
遅桜分水嶺の水浄し  
菜の花や堤のうねり夕陽まで  
合鍵や悪女めきたる春の暮  
仏間にもくねりて届く春の風  
寄り添ふは石碑の根元一輪草  
一輛車さくら並木を抜け加速  
肩甲骨をはがす体操春深し  
懐かしきソファアの窪み春愁ひ  
朝桜仰ぎて眩む齢人  
百万石の櫓を掠めつばくらめ

石山かつ子  
大橋廸代  
大村節代  
小倉倭子  
栢尾さく子  
菊池ひろこ  
大場順子  
松井由紀子  
梅澤佐江  
近藤徹平  
森川義子  
高島寛治  
河野はるみ  
野田静香  
石川理恵  
下川光子  
曲淵徹雄  
保坂翔太

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

### ▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内  
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

### ▼散歩道へ身辺トピック▼

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内  
(題をつけて)

### ▼山紫水明へ随筆▼

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

# 水 明 抄

山本鬼之介

水煙の天女の肩に名残雪  
 陽炎のカーブに軋む花電車  
 人ありてこそその里山鳥帰る  
 春泥を牛若のごと次男坊  
 半襟に大正ロマン春日傘  
 待合を隠すほど咲き白椿  
 春炬燵結婚するかしないのか  
 嬰兒の瞳に映る石鱈玉  
 磯祭皿を食み出す的鯛  
 明日を待つ家並に雪の別れかな  
 竜天に登る頃あひ海碧し  
 一斉に湖を逆立て鳥帰る  
 さみどりに染まる指先木の芽風  
 すれ違ふ仁丹の香や荷風の忌  
 先生のチョークはカーブ目借時  
 春の雲ホットミルクの薄き膜  
 出立の時迫りをり星朧  
 蒼穹や物芽の囲む忠魂碑

池田珪子  
 菅原卓郎  
 篠崎紀子  
 新 曆文  
 清水桂子  
 菅原真理  
 小林京子  
 岡田宣子  
 皆川更穂  
 阿部幸代  
 丸屋詠子  
 霜多光代  
 寺町知子  
 本橋稀香  
 森下山菜  
 綿引まりこ  
 元田亮一  
 反町 修

| 水明例会案内 | 句会名  | 日 時       | 会 場                      | 指 導 者 | 幹 事             |
|--------|------|-----------|--------------------------|-------|-----------------|
|        | 第一例会 | 第1日曜・午後1時 | 浦和コミュニティ(セ)<br>(パルコ・10F) | 山本鬼之介 | 茂小 木和京子<br>林 京子 |
|        | 第二例会 | 第3金曜・午後1時 | 本所ビッグシップ                 | 網野月を  | 山中みどり<br>青木 鶴城  |
|        | 第三例会 | 第1月曜・午後1時 | 京橋区民会館                   | 山本鬼之介 | 五明 昇雄<br>曲 淵 徹  |
|        | 第四例会 | 第1木曜・午後1時 | 浦和コミュニティ(セ)<br>(パルコ・10F) | 山本鬼之介 | 石井 喜恵修<br>反 町   |
|        | 第五例会 | 第3火曜・午後1時 | 水明発行所                    | 山本鬼之介 | 梅澤 佐江<br>河野 はるみ |
|        | 若松例会 | 第1土曜・午後1時 | 京橋区民館                    | 山本鬼之介 | 正木 萬蝶<br>石 田 慶子 |
|        | 関西例会 | 第3日曜・午後1時 | 守口市文化(セ)                 | 大橋 勉代 | 森本 早苗           |

水 明

令和六年六月一日発行 毎月一日発行

(第九十七卷 第六号)

定価 一〇〇〇円